

令和3年度
第70回近畿放送教育研究大会
第71回近畿学校視聴覚教育研究大会
滋賀大会

研究主題

“GIGA スクール構想”への挑戦!!
合言葉は「まあいっぺんやってみなはれ!」



令和3年11月25日(木)～ オンライン開催

主 催	全国放送教育研究会連盟	日本学校視聴覚教育連盟
	近畿放送教育研究協議会	近畿学校視聴覚教育連盟
	滋賀県放送教育研究協議会	滋賀県小中学校教育研究会視聴覚部会

共 催 NHK大津放送局 NHKサービスセンター

目 次

大会概要

研究主題

幼児部会

小学校部会

中学校部会

高等学校部会

特別支援学校／学級部会

全体会

第70回近畿放送教育研究大会 滋賀大会

第71回近畿学校視聴覚教育研究大会 滋賀大会

近畿放送教育研究協議会会長 十河 秀敏
近畿学校視聴覚教育連盟会長 伊藤 浩史
滋賀大会実行委員会実行委員長 一ノ宮 賢了

大会研究主題

“GIGA スクール構想”への挑戦!!
合言葉は「まあいっぺんやってみなはれ!」

開催日 令和3年11月25日(木) ※実践発表動画は当日以降もご覧いただけます。

会場 新型コロナウイルス感染拡大防止の為、参集型の研究大会は行いません。
オンラインのみでの開催となります。

※ホームページ上で、実践交流会・全体講演会の動画を視聴していただくことができます。動画をご覧いただくためには、ホームページから参加申し込みが必要となります。申し込みがまだの方は、ホームページの申し込みページから申し込みをお願いします。

主催 全国放送教育研究会連盟 日本学校視聴覚教育連盟
近畿放送教育研究協議会 近畿学校視聴覚教育連盟
滋賀県放送教育研究協議会 滋賀県小中学校教育研究会視聴覚部会

共催 NHK大津放送局 NHKサービスセンター

後援 内閣府 文部科学省 厚生労働省
滋賀県 奈良県 大阪府 京都府 兵庫県 和歌山県
米原市 大阪市 堺市 京都市 神戸市
滋賀県教育委員会 奈良県教育委員会 大阪府教育委員会
京都府教育委員会 兵庫県教育委員会 和歌山県教育委員会
米原市教育委員会 大阪府教育委員会 堺市教育委員会
京都市教育委員会 神戸市教育委員会

“GIGA スクール構想”への挑戦！！ 合言葉は「まあいっぺんやってみなはれ！」

～「つながる」「広がる」「深まる」教育を目指して、ICT・視聴覚の可能性を探ろう！～

パンデミックにより日常生活が大きく変化し、デジタルサービスの需要が一気に拡大した2020年。“デジタル元年”と位置づけられ、教育現場においてもオンラインを活用した教育の重要性が高まり、対面指導とオンラインを織り交ぜた新しい教育様式が全国的に広がった。プログラミング教育が必修化されたことや一人一台のタブレットが全国で整備されたことで、多くの教育現場においてオンラインや視聴覚機器を活用した研究が熱心に進められていることだろう。

未来を見据えた『教育の大改革』も始まった。“予測できない未来”を生きる子どもたちがいかにして、自分で考え、表現し、判断し、社会で役立てる力を習得するか、全国の教育現場で知識や技能の習得中心の一方通行の授業の見直しが始まった。価値観が多様化する社会の中で、個別最適化された学びを実現するためにも、個々に対応できるICT機器や視聴覚機器の可能性は、より広がるのではないだろうか。オンラインや放送教育・視聴覚教育の発展が、子どもたちの生きる力の育成につながるのではと期待が膨らむ。

一方で、オンラインの活用ではセキュリティ対策や情報モラルなど様々な取組の必要性も想定される。ICT機器の整備においても、まだまだ地域間格差が存在する。指導者の機器操作の得手不得手や活用の温度差により、機器活用の汎用性が損なわれる状況もある。克服すべき課題は山積している。

社会全体が、そして学校教育が大きく変わろうとする今、教育現場に大切なのは「まあいっぺんやってみなはれ」の精神ではないだろうか。これは、滋賀県にゆかりのある技術者で、日本が初めて挑戦した南極観測の第1次観測で越冬隊長を務めた西堀榮三郎氏の言葉であるが、単なる楽観的な言葉ではない。新しいことを始める時に、失敗を恐れ「難しいな…」と足踏みするのではなく、これまでの経験に基づきチームで知恵を出し合い、「えいやっ。」とやってみることが大切だと教えてくれる合言葉である。各市町村・各学校にどんな資源（視聴覚・ICT機器）があり、どのような可能性を秘めているのか、放送教育・視聴覚教育に関わる者が中心となって研究を推進し、「まあいっぺんやってみなはれ」と学校現場を後押しし、多くの学校で日々の研究がさらに高まることを期待したい。

また、今大会は現地での研修に加え、現地に足を運べない先生方がインターネットのオンラインを活用して研修に参加するハイブリッド型（現地・オンライン）の研究大会に挑戦をする。ICTや視聴覚機器を活用した授業づくり向上を志す方々が一人でも多く参加し、近畿全土で「まあいっぺんやってみなはれ」と新しい教育への挑戦が高め合っていくことを期待している。

大会長挨拶

近畿放送教育研究協議会 会長 十河 秀敏

第70回近畿放送教育研究大会並びに第71回近畿学校視聴覚教育研究大会の開催に際しまして、ご挨拶申し上げます。今大会は“GIGA スクール構想”への挑戦!!合言葉は「まあいっぺんやってみなはれ!」～「つながる」「広がる」「深まる」教育を目指して、ICT・視聴覚の可能性を探ろう!～をテーマに計画され始動しました。

しかし、コロナ禍でいろいろな教育活動が制限される中、授業公開や研修会など人が集まることのリスクを考えざる負えなくなりました。当初、リアルとリモートのハイブリッドでの開催を計画されていました。9月まで続いた緊急事態宣下のもと、リモートでの研究大会と決まりました。その原動力は、近畿の視聴覚教育・放送教育に期待、関心を寄せられている多くの先生方の学びの活力だと思っております。その活力をもとに、この大会の成功に導きたいと思っております。どうぞ、ご協力とご理解を賜ればと考えております

さて、振り返ると学習指導要領の改訂の中で、「生きる力」「新しい学力観」「確かな学力」そして「主体的・対話的で深い学び」というキーワードが次々と出てきました。そのなかで、子どもたちの学びとは何かを考え、仲間とともに常に研鑽・研修を重ねてまいりました。

一方で、私たち教員は、日々の業務が複雑になり、増大し多忙になりました。学校現場をますます離れがたい現状にあり、研修等に参加することが難しくなってきました。そのような状況の中で、コロナ禍が打撃を与えました。教員仲間と集う学習の機会や子ども同士の学習の場も奪われました。

しかし、そのコロナ禍が、一つのヒントを与えてくれました。その方法の一つが、オンラインの活用です。オンラインなら、学校現場を離れることなく、多くの先生たちが研修できるのではないかと。この状況をチャンスだととらえて新しい方法を模索していけないか。また、この時期に合わせて、ICT 機器を急速に整備されてきた自治体も多くある状況にあります。

まさしく、次世代に向けたチャンスของときでもあり、新しい教育の創造のチャレンジでもあります。この挑戦で獲得できたものが、新しい学びの創造になり、新しい歴史となっていくと考えます。

また、放送教育、視聴覚育、ICT 教育の共通の役割として「人に伝える」があると考えます。その強みを生かして、「人と人が出会うことができない」時期だからこそ、私たち教員は子どもの学びを支える手段を持つ必要があると考えました。同時に、教員同士の研修の機会確保も重要なことととらえたいと思っています。

この挑戦により、子どもたちの学びを支えるためのいろいろなツールの整備につながり、これから訪れる、先行きの不透明な社会にも、対応していけるすべになるのではないかと考えています。今回、オンラインでの開催となりました、この大会から多くの学びと新たな教育の創造のための手がかりが得られることを願っています。

最後になりましたが、この研修会の開催にあたり、ご支援をいただきました、滋賀県教育委員会をはじめ、米原市教育委員会、NHK 大津放送局にご後援いただきありがとうございました。また、公開授業校、研究実践交流会において、提案、指導助言、運営にあたっていただいた皆様に深く感謝し、お礼申し上げます。また、本研修会開催のためにご支援・ご指導をいただきました諸団体の皆様に重ねてお礼を申し上げます。

大会長挨拶

近畿学校視聴覚教育連盟会 会長 伊藤 浩史

新型コロナウイルスの感染拡大は、これまでの「あたりまえ」を大きく変えるきっかけとなりました。学校現場も例外ではなく、様々な教育活動や学校行事が制限を受ける中、研究活動についても従来通りの「あたりまえ」が通用しない状況になりました。そのような状況下、GIGA スクール構想を前倒して導入された1人1台タブレット端末の活用は、教育現場に大きな可能性と変化をもたらしました。リモートの活用は、学校によってはネットワーク環境のせい弱さという課題を浮き彫りにしましたが、新たな環境により実現した実践もあります。また、研究活動においては、リモートの環境がもたらした効果は大きいと感じており、多忙化する教育現場において「校務の効率化」と「教員の資質向上」を両立する可能性を秘めています。

このたび、第70回近畿放送教育研究大会、並びに第71回近畿学校視聴覚教育研究大会について、リモートで開催する運びとなりました。大会テーマを「“GIGA スクール構想”への挑戦!!合言葉は『まあいっぺんやってみなはれ!』」と設定し、GIGA スクール構想により実現した環境を最大限に活用した授業実践に取り組み、その成果を交流することとなりました。新しい環境を利用した授業実践は、授業者にとって大きな「チャレンジ」です。そして、大勢の参加者がリモートで参加する大会を運営することも、主催者にとって大きな「チャレンジ」です。当初は、何とか参会できないものか、あるいは現地での参会とリモートでの参加を両立する「ハイブリッド型」での開催はできないものか、多くの都道府県で9月末まで緊急事態宣言が発令される中であって、大会関係者の皆様には開催直前まで参会の可能性を探っていただきました。最終的にリモートでの開催となりましたが、今いちばん大切なのは、コロナ禍において実現した1人1台タブレット活用を通じた授業実践の成果と課題を共有し、今後の研究を深めるための共有財産にしていけることです。大会関係者の皆様には、大会開催にあたり大変なご苦勞をいただきましたが、そのおかげをもちまして、近畿の熱心な先生方がネットワークを通して参集できることに、大きな喜びを感じております。現在、「情報活用能力の育成」、「個別最適な学びの在り方」が、ICT 活用を進めるうえで重要な研究テーマとなっております。後者においては、この1人1台端末の導入が、教育現場に革命的な変化をもたらす可能性があります。だからこそ、「まあいっぺんやってみなはれ!」の精神で、チャレンジすることが欠かせません。先進的かつ優れた教育実践の数々に触れるとともに、大会では忖度のない活発な意見交流が行われることを楽しみにしております。そして、ご参加いただける皆様とともに、未来のICT活用について夢を膨らませ、語り合うことができればと考えております。

最後になりましたが、公開授業校の皆様、実践交流会における提案・指導助言をお引き受けくださった皆様、運営にあたり当大会の開催を実現に導いてくださった皆様には、多くの困難を抱える中で大会開催のためにご尽力いただいたこと、深く感謝申し上げます。また、ご後援を賜りました、滋賀県教育委員会・米原市教育委員会を始めとする各府県市教育委員会、そして共催頂きましたNHK 大津放送局・NHK サービスセンターの皆様、大会開催にあたり多大なご支援を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

タブレット端末が導入された2020年は「デジタル元年」とされています。本大会の開催を通して、今後のICT活用の可能性を探求するきっかけとしたいと考えております。本大会の成功と今後の放送教育・視聴覚教育の深化・充実に願い、ご挨拶の言葉とさせていただきます。

大会実行委員長挨拶

第70回近畿放送教育研究大会

第71回近畿学校視聴覚教育研究大会

滋賀大会実行委員長 一ノ宮 賢了

第70回近畿放送教育研究大会滋賀大会並びに第71回近畿学校視聴覚教育研究大会滋賀大会を開催するに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

私どもは、滋賀県小中学校教育研究会視聴覚部会事務局を中心に2年前から本研究大会に向けての準備を進めて参りました。この間、「Society5.0 時代を生きる全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びを実現するため、児童生徒の『1人1台端末』等のICT環境を整備する」とした国のGIGAスクール構想は、新型コロナウイルス感染拡大により、当初の予定を前倒して進められました。全国一斉の臨時休業の措置が執られる中、急速にハード面の整備が行われましたが、その活用に向けての周辺整備や教職員の研修・支援体制が追いつかない状況でもありました。

令和3年8月30日に国が公表した調査によると、令和3年7月時点で、全国の公立の小学校等の96.1%、中学校等の96.5%が、「全学年」または「一部の学年」で端末の利活用を開始しているということです。また、その中で、課題としてあげられていたことは、学校での学習指導での活用の在り方、教員のICT活用の指導力、持ち帰り関連などでありました。

本市におきましても、昨年度末には1人1台の端末が整備され、4月から活用が始まりましたが、一斉に使用すると接続が不安定になるなどの問題が発生しました。また、教員が不安感なく授業の中で端末を活用するためにはICT支援員の配置も欠かせません。さらに、教員への研修の機会の充実も望まれるところです。同じように多くの学校において課題は山積しており、使ってみて課題をあぶり出し克服してステージアップしていく形で進んでいるのが実情でしょう。

このような大きな変革期の中、放送教育、学校視聴覚教育の分野に期待されるものは大きいと感じております。価値観が多様化する社会の中で、個別最適化された学びを実現するためにも、個々に対応できるICT機器や視聴覚機器の可能性はより広がり、オンラインや放送教育・視聴覚教育の発展が、子どもたちの生きる力の育成にもつながることでしょう。まさにこのような思いから、本研究大会を計画準備してきたところであります。

本来であれば、皆様に会場に参集していただき、実際に授業を参観していただき、また、実践発表を聞いていただきながら、議論すべきところではありますが、新型コロナウイルス感染状況等の社会情勢を鑑み、苦渋の選択として最終的にオンライン上のみでの発表といたしました。なお、公開授業動画・実践発表動画・講演は令和4年1月7日まで視聴可能となっていますので、気になるところを何度も視聴していただくことができます。ご覧いただき、様々なご意見をお寄せいただければ、私どもといたしましても幸甚に存じます。

最後になりましたが、本研究大会の開催にあたり公開授業や実践発表、指導助言をしていただいた先生方、後援いただいた文部科学省をはじめ、各市・府・県教育委員会等行政機関の関係者様、さらに共催をいただきましたNHK大津放送局様・NHKサービスセンター様に厚くお礼を申しあげてご挨拶とさせていただきます。

オンライン大会への参加方法

① [滋賀県放送教育研究協議会ホームページ \(audiovisual.jp\)](https://audiovisual.jp)

から各自が申し込む。

(右の二次元コードからホームページに入ることができます。)



② 大会事務局より、登録いただいたメールアドレスに「ユーザー名、パスワード」を送信する。

(11月中旬までにメールを送ります。)

③ [ホームページ \(audiovisual.jp\)](https://audiovisual.jp)の「データアーカイブ」内の「大会動画の視聴はこちら」をクリックし、届いた「ID、パスワード」を入力する。

滋賀県放送教育研究協議会 番組やICTを活用した授業づくりを応援し、放送教育の拡充をめざす

組織について 研究大会概要 データアーカイブ お問い合わせ・申し込み

研究発表
データアーカイブ
archive

データリスト

大会動画の視聴はこちら >

登録日	ファイル	備考
2021.6.10	実施要項 (7月現在)	後援申請などの際にはこちらをご活用ください
2021.6.10	実践報告ひな形 (近畿大会用)	完成後、PDF形式で報告ください

このサイトにアクセスするにはサインインしてください
https://audiovisual.jp では認証が必要となります

ユーザー名

パスワード

サインイン キャンセル

大会事務局より届いた「ユーザー名、パスワード」を入力し、視聴ページへお入りください。

④ 11月25日以降、実践発表動画・講演 (NHK) を視聴可能!

(令和4年1月7日まで視聴していただくことができます。)

視聴可能な動画

- ・校種別実践発表動画 (幼・小・中・高・特別支援)
- ・全体会講演動画 (NHK for School の活用について)

オンライン参加に関する諸注意

<大会参加にあたっての注意事項>

○大会用ID・パスワードは、ご自身で管理していただき、他の人との共有はしないでください。

○実践発表交流会・ワークショップ・講演会等、当サイトの録画、撮影（スクリーンショットを含む）は、参加者の著作権、肖像権や個人情報保護（氏名・所属など）の観点から、一切禁止とさせていただきます。

○本大会の内容を SNS 等に無断で掲載することは、おやめください（但し報道や研究のための引用についてはこの限りではありません）。

○大会資料（公開授業指導案、実践発表交流会資料）は、各自PDFファイルをダウンロードし、ご用意ください。

<その他お知らせ・ご協力のお願い>

○NHK for School のリンクを設けております。ぜひご覧下さい。

○大会終了後、メールにてアンケートを送信いたします。
ご協力をよろしくお願いします。

幼稚園部会(幼稚園・こども園・保育所)

研究主題

幼児の生活体験を広げ遊び(学び)を深める

放送・情報教育のあり方を考える

研究概要

①講演(ホームページのアーカイブ上で動画公開 ※視聴方法は6ページをご覧ください。)

テーマ 『NHK の幼保向け番組とアプリの活用で
子どもの意欲・関心を高める保育を!』

講師:NHK 制作局 チーフ・プロデューサー 橋本 太郎氏
チーフ・ディレクター 矢野 あかね氏

講演内容

幼稚園・保育所・小学校低学年向け番組と、「NHK キッズ」アプリを、NHK の各担当者が動画と資料でご紹介します。効果的な活用方法や、幼稚園・保育所での実践例など、保育活動の一助にしていいただければと思います。

②研究実践交流会(ホームページのアーカイブ上で動画公開)

部会	提案主題	提案者	助言者
幼稚園 こども園 保育所	ぶんちゃん大好き! ～生き物を通して学ぶ子どもたち～	和歌山市立宮前幼稚園 小出 紗有里	
	幼児の生活体験を広げ、遊び(学び)を深める 放送・情報教育のあり方を考える	大津市立幼稚園 視聴覚保育部会	大津市立幼稚園元園長 山田智子

ぶんちゃん大好き！

生き物を通して学ぶ子供たち

ダイジェスト(概要)

生き物に興味をもち、生き物について調べたり、世話をしたりしながら命の大切さを感じる。

[キーワード]

思考力の芽生え 自然との関わり・生命尊重 言葉による伝え合い 豊かな感性と表現

1. 実践のねらい

昨年度3歳児の時から、保育室で飼っていたカブトムシに子供たちは興味を持って接したり、冬の間もカブトムシの幼虫に水をあげたり、うんちを取って掃除をしたりと、幼虫の世話をしたりする姿が見られた。今年度、その子供たちを引き続き担任することとなった。子供たちの様子を見てみると、興味が途絶えず、変わらず「コロちゃん」とカブトムシの幼虫に呼びかけながら世話をする様子も見られた。そして、6月初旬、世話をしていた幼虫が成虫になった。その後も、子供たちは「ぶんちゃん」とカブトムシに名付け、毎日欠かさず世話をしている。カブトムシの生活や動きを見て、不思議さを感じたり、カブトムシへの思いやりの気持ちをもって接したり、友達と一緒にカブトムシについて話したり、図鑑で調べたりする様子も見られている。生命の誕生や終わりを直接体験しながら、生き物への温かい感情の芽生えや生命を大切にしようとする心を育て、心がより豊かに育って欲しいとねらい、取り組むこととした。

2. 実践の方法・流れ

まずは、直接体験を充実したものとするために、子供たちがカブトムシを自分の目で観察したり、観察したことと図鑑の絵などと照らし合わせながら、子供たちなりにカブトムシについての知識を広げたり、興味をより深いものにしていくことができるように援助することとした。通常の飼育ケースではなく、友達と一緒に囲んでカブトムシの観察を行うことができるよう、透明の大きな衣装ケースを飼育ケースとして使用した。その近くには、様々な種類の図鑑や絵本を保育室内に用意するようにした。また、教師は、子供たちのカブトムシに関する発見を認めたり、「ぶんちゃんお腹空いてるかな」など、カブトムシの気持ちを考えることができるような声かけをしたりした。さらに、子供たちがじっくりとカブトムシと関わり、カブトムシの想像を膨らますことができるような時間、教師や友達と気付いたこと

を話し合う時間をたくさんとるようにした。その後、直接体験をもとにカブトムシについての成長の映像を見ることで、より子供のカブトムシへの興味や理解を深めていくことができるようにした。

3. 実践の結果・考察

子供たちは、これまでカブトムシの世話をし、観察することを重ねながら直接体験してきた。そのためか、子供たちのカブトムシへの興味は強いものとなり、映像を改めて見ることで、直接体験と映像が重なり、よりカブトムシへの理解を深めることができたように感じる。映像を見ながら、「コロちゃんがぶんちゃんに変わっていった」「角出てくるなあ」など友達と会話をしたりする様子も見られた。また、幼虫から成虫に変わっていく様子は間近に見ることは直接体験できなかったため、子供たちも興味津々にその様子を映像で見ていた。幼虫が脱皮を繰り返しながら成虫になって、飛び立つ瞬間、子供たちは、「おめでとう」と歓声をあげながら、拍手をし、カブトムシの誕生を喜ぶ様子も見られた。直接体験をもとにし、そこからより視覚的にわかりやすい、視聴覚教材(DVD図鑑「自然になに?」)を使用することで、子供たちはよりカブトムシへの興味や理解を深めることができたように感じる。その後も、毎日欠かさず世話をし続けた。



4. 今後に向けて

今後は、カブトムシに限らず、様々な生き物についても積極的に視聴覚教材を用いたり、また、季節折々の自然物(葉や木の実)などにも視聴覚教材を用いて友達と同じ物を共有しながら、興味・関心を広げたり、友達と共通の話題にし、友達との関わりを増やすための一つの教材としても利用していきたい。

幼児の生活体験を広げ、遊び（学び）を深める

放送・情報教育の在り方を考える

大津市立幼稚園「視聴覚保育部会」では、番組の視聴・視聴覚教材の活用等を通じて幼児の生活が豊かになる保育を目指している。教材研究や実践交流を重ねることで、教師自身の幼児理解や保育観の広がりにつながり、保育力の向上に生かされている。

[キーワード] 直接体験と視聴覚教材の融合 / コロナ禍における視聴覚機器の活用

1. 実践のねらい

『幼児の生活が豊かになる』ことを願い、次のような視点で研修に取り組む。

- (1) 実際に見る、触る等による直接体験と、映像を見ることによる間接体験の意義の理解
- (2) 視聴することと、保育を豊かにすることとの関連性
- (3) 興味・関心を深めたり、知ったり、気付いたり、発見したりできるような教材活用

2. 実践の方法・流れ

＜番組視聴＞

- ・『しぜんとあそぼ～だんごむし・かたつむり・ざりがに～』を「命の大切さを感じる」「興味・関心をもつ」ことを願って視聴した。
- ・視聴後は園外保育や飼育、ごっこ遊び、絵画表現などの活動につながるようにした。

＜視聴覚機器の活用＞

- ・コロナ禍での幼小交流を模索し、小学校からの動画を視聴し、幼稚園でも作成した。

3. 実践の結果・考察

- 番組視聴・視聴覚機器の活用をきっかけに、興味関心が膨らみ、その後の活動がより主体的なものとなった。
- 知識を得ることで、発見の喜びを感じ、自信をもって表現する姿があった。
- 見ることで、直接出会うことへの子どもの抵抗感やためらいが和らぎ、親しみに変わった。

○映像は、一つの場面をクローズアップして見られるので、友達と同じ視点や情報を共有し、感じ合うことができた。

○視聴するタイミング（興味をもった時や、深めて欲しい時、見通しをもたせたい時など）は逃さず、余韻を楽しむための時間や場の保障をしていくことが重要であるとわかった。

○協議を進めていく中で、番組視聴や視聴覚機器の活用の際には、教師自身が何を幼児に気付かせたいのか、視点やねらいを焦点化させることが大切であると共通理解できた。また、コロナ禍においても、視聴覚機器を活用することで体験につながる可能性を見出すことができた。

4. 今後に向けて

「もっと知りたい！」という『探究的な活動』につながるツールとして視聴覚機器を活用し、幼児に刺激を与え、主体的な動きや考えが起こる保育展開につなげていきたい。

今後子どもたちは、ますますIT化された世界の中で生きていくことになる。だからこそ幼児期においては、直接体験が大切であり、視聴覚教材はあくまで実体験が豊かになるための一つの手段であるという認識を共通理解しながら有効活用していきたい。

1. 視聴覚保育の取り組みの変容

幼児の家庭での過ごし方は、以前は、地域の中で群れて遊ぶ時代であった。だからこそ、幼稚園での放送（視聴覚）教育は、先生や友達と一緒に同じ番組を視聴し、そこから想像力を膨らませたり、遊びの発展の動機づけにしたりする新しい教育観として位置づけられていた。

しかし、近年では、家庭での遊び時間はほとんど動画を見て過ごしている幼児が大多数だ。この時代の変化を捉え、今、幼稚園に求められているものは何かを探っていかなければならない。視聴覚保育を通じて、幼児や教師は何を学ぶのか、をさらに深く読み解いていくことが必要であると言える。

2. 実践報告より

○事例1 ～不思議がいっぱい！だんごむし・かたつむり～

手の中でダンゴムシの赤ちゃんが産まれたのは偶然。でも、その偶然が学びになるには、幼児が夢中になれる経験（遊び）が展開されていることが前提条件となっている。

また、飼育するだけでなく、番組を見た幼児が「カタツムリになりたい」とつぶやいたことは、いかに心が動いたかが伝わってくる。

このように、幼児の遊びが学びへと深まるには、教師に提示された活動だけでなく、興味関心に基づいた経験のため込みが大切である。それには、幼児の主体性や時間、場が十分に保障されているからこそである。そして、その偶然や幼児のつぶやきに、学びを見取る教師の眼が必要なのである。

○事例2 ～ザリガニ釣りに出かけよう！～

視聴覚教育は間接的体験で、受動的と考えがちであるが、この事例では、実際にザリガニ釣りという直接体験の動機づけや興味関心の意識づけの一つとして、意図的に視聴している。そして、それで終わらず、様々な遊びや活動に広がり派生していく楽しさを、教師が実感していることが意義深い。

○事例3 ～幼稚園のことを知らせよう！～

ビデオレターを見た幼児の小さな気付きや、どうしたらうまく小学生に伝わるかを考える力、友達とそのことを相談する言語活動、また歌やリズムなどの表現活動、総合的な学びがその中にあるということを、教師が読み取っている。このことが、まさに保育の質の向上につながっていくと言える。

3. 保育を創造する、経験をコーディネートする

ザリガニ釣りを通じて「地域の人や自然との触れ合い」をねらいとする恒例の行事。出かけるだけでも十分学びはある。しかし、ここでは、事前視聴という工夫を、従来の保育に加えようとしたことが意味深い。

また、コロナ禍の幼小交流に、消極的になるのではなく、新しい試みに挑戦するところが素晴らしい。

そして、それを教師だけが考えるのではなく、幼児自らも、どうすればよりよい方法になるかを共に考えていることに意味がある。

まさにこの研究テーマ通り、幼児の体験を広げ、遊び（学び）を深めたい、という教師の意識の熟成が見られ、慣例にとらわれない保育の創造、学びへの意欲を幼児と共有し、経験をコーディネートしていく教師の力量の向上につながる事となった。

小学校部会

研究主題

生き生きと学び合う子どもの姿を求めて

研究概要

①公開授業（米原市立米原小学校）

（新型コロナウイルス感染拡大防止の為、参集型の研修会は行いません。指導案をご覧ください。）

学年／組	指導者	教科	単元名	利用番組・メディア
2年3組	松村 智太	算数科	かけ算	ミライシード「オクリンク」
4年2組	宮村 保	体育科	器械運動	NHK for School 「はりきり体育ノ介」
6年2組	長尾 好倫	外国語科	ニュージーランドの友だちと将来の夢などについて伝え合おう	ミライシード「オクリンク」 Zoom

②研究実践交流会（ホームページのアーカイブ上で動画公開）

部会	提案主題	提案者	助言者
小学校① 教科	教科の学習で情報活用能力を育成する	大阪市立友渕小学校 豊島 克充	大阪市立宝栄小学校 西畑 寧三
	PowerPoint を活用した教材研究	彦根市立佐和山小学校 岸本 翼	彦根市立城陽小学校 上松 由美子
小学校② 生活・総合	一人の百歩より、みんなの一步を ～GIGAスクールを学校に定着させるために～	桜井市立城島小学校 西本 修明	桜井市立桜井小学校 前 浩輔
	児童用タブレットを活用した授業づくり ※申し訳ありませんが、実践動画をご視聴いただくことができません。	野洲市立北野小学校 岡嶋 大輔	
小学校③ メディア	1人1台タブレット端末で 「教える場」から「学ぶ場」へ	丹波市立東小学校 小林 真子	丹波市立青垣小学校 堀 博文
	Chromebook を利用した授業の工夫	守山市立守山小学校 岩岡 伸和	東近江市立愛東南小学校 小林 大輔
小学校④ 道徳・心の教育	子どもたちのスタートラインをそろえる 道徳科の授業づくりをめざして	京都市立御所南小学校 小川 辰巳	
	道徳教育の実践 ～iPad を活用して～	大津市立藤尾小学校 五十嵐 脩人	滋賀県放送教育研究協議会 松崎 敏和

第2学年 算数科学習指導案

日 時 令和3年 11月9日（火）3校時
場 所 2年3組教室
児 童 26名
指導者 松村 智太

1 単元名 「かけ算」

2 指導によせて

（1）児童の実態

かけ算は、児童が楽しみにしている学習のひとつであり、学習前に九九を唱えられる児童もいるなど、関心が高い。一方で、九九は唱えることができるが、乗法の意味や考え方について理解が不十分な様子が見られる。本単元は、加減法に加えて児童が乗法の解き方やしくみに触れる初めての機会となる。既習事項を用いて友達と交流しながら、児童が乗法のしくみを理解し、自分で九九を構成し、活用できるように学習を進めていく。

（2）教材について

「かけ算」の学習を通して育てたい力は主に次の3つである。

- ① 式を構成する力（求めたい数をまとまりで捉え、式を立てること。）
- ② 考えをつなげる力（絵などの具体的表現、お皿図などの図的表現、おはじきなどを使う操作的表現、「○この□つ分は△こ」の言語的表現、式 $\bigcirc \times \square = \triangle$ の記号的表現の5つの表現の仕方がわかり、1つの表現につなげて、ほかの表現でも表せるようにすること。）
- ③ 考えを説明する力（自分の考え方を、友だちにわかるように説明すること。）

（3）指導の手立て

かけ算の構成を理解するためには、まず同じ大きさの集まりであるということに着目させることと、それがいくつ分であるかをはっきりと意識づける必要がある。そこで、学習の前半部では、繰り返し絵や写真などの具体物から、お皿図に丸をかいて図的表現をしたり、「○この□つ分は△こ」の言語的表現をしたり、おはじきなどを操作したりすることで、かけ算の構成を捉えられるようにする。その後、言葉で表した考え方と関連させながら、 $\bigcirc \times \square = \triangle$ の立式につなげていく。後半部では、オクリンクを用いて、自分の考えを整理して、友達の見え方につなげて考えていきながら、九九の構成を理解し、九九を自分で組み立てられるようにしていく。話し合いや発表の中で出てきた考え方には『○○作戦』と名前をつけ、教室掲示として残していく。出てきた方法を整理するとともに、自分の考えと友だちの『○○作戦』を比べて考えられるようにする。九九を用いた問題作りでは、図・絵・式・言葉を使って、問題を作っていく。出来上がった問題を宿題に出したり、授業中に出题したりすることで、児童の学習への意欲付けにつなげる。意見交流の場面では、オクリンクを活用し、自分の考えを友だちに説明しやすくするとともに、友だちの考えを自分の考えをつなげて、理解を深められるようにする。

3 単元目標

おさら図やドット図などを使った活動を通して、九九を構成したり、かけ算を使って問題を解決したりすることができるようにするとともに、生活や学習に活用しようとする態度を養う。

4 評価規準

【知識・技能】

九九の構成の仕方やかけ算が用いられる場面について理解する。また、かけ算の式に表したり、九九を唱えたりして、問題を解くことができる。

【思考力・判断力・表現力】

かける数が1増えると積はかけられる数だけ増えることを使って、九九を構成することができる。

【主体的態度】

かけ算や九九のきまりのよさがわかり、すすんで用いようとする。

5 指導と評価の計画（全13時間 本時…11/13）

次	時	学習活動	教師の支援	評価規準・評価の方法
1	① ⑧	・6～9の段の順に九九づくりをする。 ・6～9の段の九九を用いて適用問題を解く。 ・積の増え方のきまりをつかって、積の求め方を簡潔に考えることができる。 ・九九を使った問題作りをする。 ・かけ算ビンゴや5×5の25マス計算（参考資料）をする。	・考えが整理しやすいようにワークシートを用意する。（参考資料） ・繰り返し「○この□こ分は△こ」を練習させ、かけ算の構成が理解できるようにする。 ・操作活動や絵に表す活動を取り入れ、式や図と関連して考えられるようにする。 ・かけ算ビンゴや25マス計算を繰り返す行うことで、九九の習熟を図る。	思・判・表 乗数が1ずつ増えると答えがその段の数ずつ増えることに気づき、九九を構成している。 態度九九の唱え方を知り、意欲的に身につけようとしている 知・技6～9の段の九九を用いて適用問題を解くことができる。
2	⑨ ⑫ (本時⑪)	・練習問題を解く。 ・同じ数のまとまりに注目して、かけ算をつかって問題を解く。	・オクリンクで自分の考えを表し、友だちに共有できるようにする。 ・他の子が考えた式や図だけを見せて、考え方を予想し、発表させる。	思・判・表 同じ数のまとまりに着目して、かけ算を使って考えたり説明したりしている。 態度考え方の違いや似ているところを見つけようとしている。
3	⑬ ⑭	・生活の中のかけ算を探す。 ・まとめの問題を解く。	・練習問題を通して、九九の便利さを体験させ、九九の理解を深める。	態度生活の中からかけ算で表せる数を見つけ、九九を活用しようとする。

6 本時の展開

(1) 本時の目標

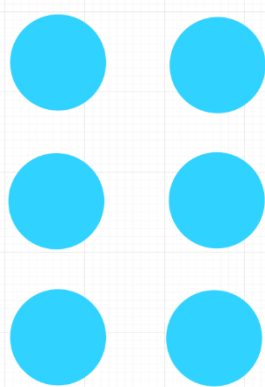
同じ数のまとまりに注目して、ドットで表された数をかけ算を使って求めることができる。

(2) 本時の学習展開

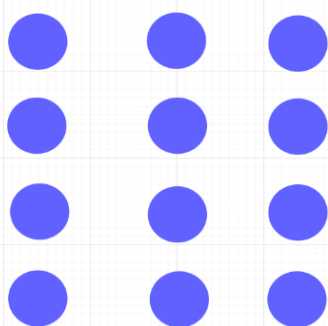
学習活動	教師の支援	評価規準・評価の方法
《導入》 ① かけ算ビンゴをする。 ② 図1をオクリンクで提示し、本時の課題をつかむ。 めあて ドットの数のもとめ方を考えて友だちにしようかいしよう ③ 図1の問題に取り組み、全体で交流する。	・「友だちに分かるように説明する」という目的意識をもたせる。 ・見通しがもてない児童のために、3×4の答えの求め方を例にとって、何人かにアイデアを発表させる。	
《展開》 ① 図2・3の問題に取り組み、ペアで交流する。 ② 図4の問題に取り組む。 全体で交流する。その際、一人の子にすべて発表させず、友だちが考えた式や図だけを見て、他の子が説明する ③ 振り返りを記入する。	・アイデアが浮かばない児童は、周りの人と話すよう声をかける。 ・お皿が書かれているプリントとかかれていないプリントを用意し、選択させる。 ・いいアイデアが途中で浮かんだら変更していいようにする。	思・判・表 自分の考えを友だちにわかりやすく伝えることができる。(発表、オクリンクのカード)
《終末》 かけ算ビンゴの残りの九九の答えを記入する。	・暗記が不十分な児童は、九九カードを使うようにする。	

8 参考資料

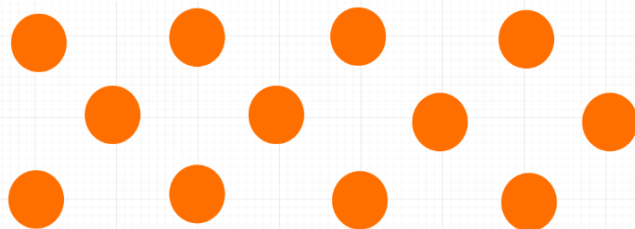
チャレンジ①



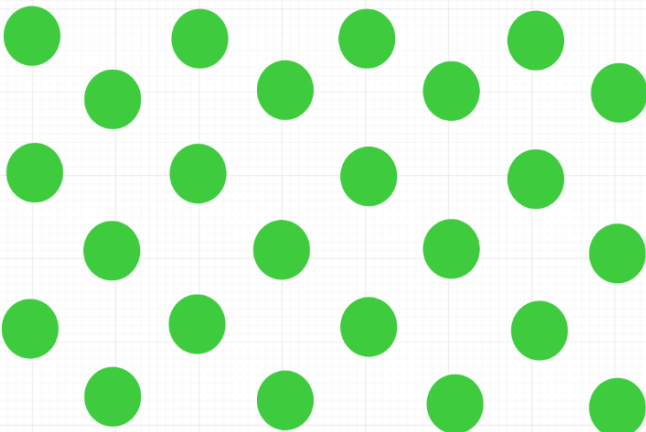
チャレンジ②



チャレンジ③



チャレンジ④



第4学年 体育科学習指導案

日 時 令和3年10月26日（火）3校時
場 所 体育館
児 童 36名
指導者 宮村 保幸

1. 単元名 マット運動 「打倒！体育ノ介！」

2. 単元の目標

【知識及び技能】

- ・回転系や巧技系の基本的な技ができる。

【思考力・判断力・表現力等】

- ・自己の能力に適した課題を見つけ、技ができるようになるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えることができる。

【学びに向かう力・人間性等】

- ・運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲良く運動したり、友達の考えを認めたり、場や器械・器具の安全に気をつけたりすることができる。

3. 単元の評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
①基本的な技の動き方や技のポイント、練習の仕方を理解している。 ②基本的な回転技や倒立技ができる。	①基本的な技の動き方や技のポイントを知るとともに、自分の力に合った課題を選んでいる。 ②技のポイントを観察し合って伝えている。	①運動する場や器械・器具の使い方を理解している。 ②技ができる楽しさや喜びに触れることができるよう、マット運動に進んで取り組もうとしている。 ③友達と協力して、器械・器具の準備や片付けをしようとしている。 ④運動のきまりを守り、友達と励まし合って運動しようとしている。

4. 指導にあたって

(1) 単元について

【一般的特性】

- ・自己の能力に応じた回転系や巧技系の技に挑戦し、個々の技やこれらの組み合わせが円滑にできるようになることに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。
- ・タイミングの良さ、力強さ、体の柔らかさが向上する。
- ・床、平面での身体表現である。

【児童からみた特性】

- ・非日常的な動きではあるが、できなかった技が出来るようになったり、技がさらに上達したりしたときに達成感や喜びを味わうことができる。
- ・技の組み合わせを考えることで、運動に取り組む意欲を向上させることができる。

(2) 児童について

本学級は、明るく元気な児童が多い。休み時間は、ドッジボールや鬼ごっこなどで体を動かす児童が多くいるが、教室で読書をしたり折り紙をしたりしている児童もいる。最近では、タブレット端末内の学習支援ソフト・ミライシードの中にある AI ドリル「ドリルパーク」やローマ字タイピング練習に取り組んでいる児童もいる。体育の学習を楽しみにしている児童は多く、学習に意欲的に取り組むことができる。しかし、運動ができる児童とできない児童の差は大きくなってきている。

本単元に取り組むにあたり、児童の実態を把握するために以下のようなアンケートを行った。結果は次の通りである。

【令和3年9月21日実施（36人回答）】

項目	回答	人数	割合
①運動することは好きですか。	好き	26 人	72%
	どちらかというとき好き	6 人	16%
	どちらかというとき嫌い	2 人	6%
	嫌い	2 人	6%
②体育の学習は好きですか。	好き	23 人	64%
	どちらかというとき好き	10 人	28%
	どちらかというとき嫌い	1 人	2%
	嫌い	2 人	6%
③マット運動は好きですか。	好き	18 人	50%
	どちらかというとき好き	8 人	22%
	どちらかというとき嫌い	5 人	14%
	嫌い	5 人	14%
④友だちと一緒に運動するのは好きですか。	好き	28 人	78%
	どちらかというとき好き	7 人	20%
	どちらかというとき嫌い	0 人	0%
	嫌い	1 人	2%

以上のアンケートの結果から、運動することが好きな児童は比較的多いことが分かる。体育の学習が「好き」「どちらかという好き」の児童が全体の9割以上を占めているが、一方で、マット運動については、「好き」「どちらかという好き」といった肯定的な考えをもつ児童は全体の7割程度と減少していることが分かる。

(3) 指導について

事前のアンケートから、マット運動が「嫌い」「苦手」という児童がいることが分かった。児童がもつ「全くできそうにない」「うまく技ができない」といった気持ちを「もう少しでできそうだ」「もっと上手くできるようになりたい」という安心感や前向きな気持ちに変えていきたい。そのために、感覚づくりの運動の仕方や場の設定の仕方、グループ学習の仕方などを工夫していく。

①学習の流れをパターン化

児童が見通しをもって学習に取り組めるようにするため、学習の流れを「感覚づくり」「ポイントタイム」「交流タイム」「チャレンジタイム」「ふりかえり」とする。

②毎時間のはじめの感覚づくり

授業のはじめに「感覚づくり」の時間を設定し、着手や支持の感覚、回転の感覚などを養える運動を取り入れ、技の習得の手助けになるようにする。後転ではゆりかご、側方倒立回転ではかえるの足打ちや川とびなど、技につながる動きを多く取り入れる。

③ICT 機器の活用

本単元では、NHK for School 動画「はりきり体育ノ介」と、タブレット端末による動画撮影を行う。練習する前に「はりきり体育ノ介」を視聴して技のポイントを確認する。そして、確認したポイントを意識しながら、グループごとに学習に取り組む。そして、チャレンジタイムで動画撮影を行う。着手、頭の着き方などの「瞬間」を切り取ることができるため、課題も分かりやすく明確になるといえる。また、「(撮影) 準備 OK」の合図を送ることで、安全面の確保にもつながると考えられる。

④グループ学習の工夫

本単元では、グループ学習を基本とする。グループは3人1組とし、準備や運動、動画撮影、後片付けを行う。動画撮影の際、技を行う児童は、自分が意識するポイントを試技の前に確認する。他の2人のうち、1人は意識するポイントができているかを観察し、もう1人はタブレット端末で動画撮影をする。試技後、3人で動画を確認しながら振り返り、よりよい技の習得につながるようにする。

⑤学習カードの工夫

学習カードに毎時間の振り返りを書くことで、学習の積み重ねを行う。学習全体を振り返り、自分ができるようになったことや、さらにのびたいことをワークシートに記入する。自分の試技の動画を見返すことで、できたところやできなかったことが明確になり、次時で克服できるようにする。

5. 単元指導計画（全9時間）

時	1	2・3・4	5・6（本時）・7・8
0	<u>オリエンテーション</u> ○学習の進め方を知る。 ・ねらい ・安全面について ・約束について ・用具の出し方 ・用具のしまい方 ・学習カードについて ○前転・後転に挑戦する。 ・子どもたちの実態を把握し、課題を見つける。 ・マットに慣れる。	1. 用具や場の準備 2. 準備運動（手首、首、肩、足首をしっかりとストレッチ） 3. 感覚づくり（ゆりかご立ち、ゆりかごジャンプ、かえるの足打ち、ブリッジなど） 4. めあての確認 美しい前転・後転のポイントを見つけよう。 開脚後転に挑戦しよう。 5. ポイントタイム ・「はりきり体育ノ介」を視聴し、技のポイントを確認する。 ・友だちと助け合い、教え合いながら練習に取り組む。 【前転】 ○両手は横一直線に着く。 ○頭の後ろ→背中→腰。 ○足を大きく開いて転がる。 ○着いた手を見たまま起き上がる。 【後転・開脚後転】 ○手は耳の横。 ○お尻をかかとから少しはなして下ろす。 ○指先から手のひらを着く。 ○手で押して起き上がる。	側方倒立回転のポイントを見つけよう。 側方倒立回転を身につけよう。 ・ポイントを確認しながら練習に取り組む。 【1時間で1つずつポイントを身につける】 ○片足を勢いよく踏み出し、後ろ足を大きく振り上げる。 ○手は「ハ」の字に、片手ずつ着く。 ○つま先は最初に立っていた方向に向けて足を下ろす。 ○手でマットを押して起き上がる。
45分	8. 学習のふりかえり・後片付け ・動画を見返し、今日の学習で学んだことやできるようになったことをふりかえりカードに記入する。		

6. 本時の展開（6／8時間）

（1）本時の目標

側方倒立回転のポイントを知り、側方倒立回転ができるようになる。

（2）ICT を活用して期待する効果

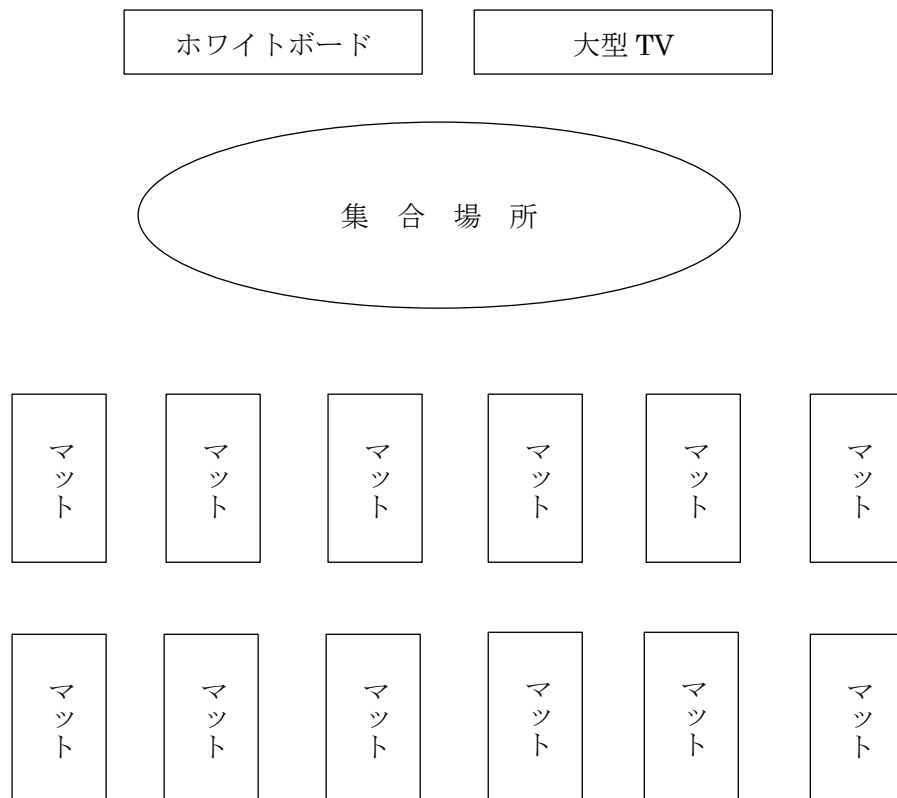
動画撮影をすることによる技能向上、対話的学習

NHK for School「はりきり体育ノ介」を視聴することによる技能向上、意欲向上

（3）本時の展開

時間	学 習 活 動	教師の支援・評価（◇）
0	1. 用具や場の準備	・友だちと協力し、安全に素早く準備ができるように声かけをする。 ・感覚づくり運動で、側方倒立回転に関連した基礎感覚を身に付けることができるようにする。
5	2. 準備運動（手首、首、肩、足首をしっかりとストレッチ）	
10	3. 感覚づくり運動 ・グループごとにかえるの足打ち、川とびを行う。	
15	4. 本時のめあてを確認する。 できるポイント② 手をハの字に着こう。	
20	5. ポイントタイム【「はりきり体育ノ介」を視聴】 ・ポイントを確認しながら練習に取り組む。 ・友だちと助け合い、教え合いながら練習に取り組む。	・側方倒立回転のポイントと自分の課題を確認できるようにする。 ・動きのいい児童に演じさせ、ポイントに気付かせる。 ◇側方倒立回転のコツやポイントを観察し合って伝えている。 【思考力・判断力・表現力等】
25	6. 交流タイム ・側方倒立回転のポイントを確認し、友だちの動きからコツを見つける。	
35	7. チャレンジタイム【タブレット端末で動画撮影】 ・友だちと助け合い、教え合いながら練習に取り組む。	
45	8. 学習のふりかえりをする。 ・今日の学習で学んだことやできるようになったことをふりかえりカードに記入する。 9. 後片付け	

8. 場の設定



10. 考察

成果

- ・ 具体物（軍手、赤玉）を使ったことで、手を着く位置や目線の意識づけができた。
- ・ 単元を通してタブレットで動画撮影しているので、スムーズに扱うことができ、カメラの角度を工夫している児童もいた。
- ・ 学習の流れをパターン化することで、見通しをもって取り組むことができた。
- ・ 「はりきり体育ノ介」を視聴することで、技のポイントが明確になり、学習に取り組みやすくなった。

課題

- ・ 自分の技に集中してしまい、教え合いがあまりできていなかった。
- ・ 動画を撮影して終わりになっていたので、動画を見ながらグループで話したり、最初と最後を撮影して比べたりするなどできれば、学びが深まったと思う。
- ・ 動画撮影に夢中になり、隣のグループの邪魔をしてしまうことがあった。安全面の配慮が不足していた。
- ・ できる児童とできない児童の差があった。できない児童のためのスモールステップの場があると、取り組みやすかったと思う。

マット運動「打倒！体育ノ介！」 学習カード

4 年 組 番 ()

	めあて	ふりかえり	点数
1	マット運動の学習の進め方や取り組み方を知ろう。		点
2			点
3			点
4			点
5			点
6			点
7			点
8			点

☆マット運動のやくそく

① 安全第一！

・・・一番大切なことです。けがをしないようにすること。
ふざけずに、真剣に取り組みましょう。

② チャレンジ！

・・・たくさん練習することが、上達の近道です。
自分のレベルに合わせて、どんどんチャレンジしていこう。

③ One Team！

・・・マット運動は、グループの仲間と協力して取り組んでいきます。
友達と助け合い、協力し合い、はげまし合い、教え合い、話し合い、
友達とともにレベルアップしていこう。

☆学習カードについて

○「ふりかえり」：今日の学習で学んだことやできるようになったことのほかに、
「こうしたらうまくできた」「〇〇さんがやさしく教えてくれた」など
やってみて分かったことが書けるといいですね。

○「点数」：今日の自分のがんばりを点数で書きましょう。

5・・・とてもよくがんばった
4・・・まあまあがんばった
3・・・ふつう
2・・・あまりがんばれなかった
1・・・全然がんばれなかった

☆側方倒立回転のポイント



第6学年 英語科指導案

日 時:令和3年11月19日(金)1校時
場 所:米原市立米原小学校 6年2組教室
授業者:長尾 好倫(HRT)
雲根 智城(JTE)
イベット・オロサ(ALT)

1 単元名 夢について伝え合おう What do you want to be?【Unit8 “My Future, My Dream”】

2 単元の目標

- (1)将来の夢やなりたい職業について日本語と英語での言い方等の違いに気づき、言い表すことができる。(知・技)
- (2)将来の夢やなりたい職業について、学習した英語を用いて様々な人と伝え合う。(思・判・表)
- (3)将来の夢やなりたい職業に関連し、音声で十分に慣れ親しんだ言葉や表現について、読んだり、目的をもって書き写したりすることができる。(思・判・表)
- (4)将来の夢やなりたい職業について、相手を意識して伝え合おうとする。(態度)

3 単元の評価規準

【知識及び技能】

「I want to～」及びその関連語句などについて理解している。自分の将来の夢や、お互いの考えや気持ちなどを伝え合うための言い方や尋ね方に慣れ親しんでいる。

【思考力、判断力、表現力】

簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分のこと(将来の夢など)を伝えたり、相手のことをよく知ったりすることができる。

【学びに向かう力、人間性等】

簡単な語句や基本的な表現を用いて、お互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。
英語の背景にある文化に対する理解を深めようとしている。

4 単元で扱う主な語や表現

【表現】

「What do you want to be?」「I want to be a(an)～」etc…

【語彙】

職業(singer,teacher,dancer,famer,など)

5 児童の実態(男子16名、女子18 合計34名)

本単元の学習に取り組むにあたり、児童の実態把握のためのアンケートを行った。

(◎よくあてはまる、○あてはまる、△あまりあてはまらない、×あてはまらない)

質問項目	◎	○	△	×	無回答	合計
①英語に興味や関心がありますか?	6	15	5	2	6	34
②これからの将来、英語は必要だと思いますか?	21	6	1	0	6	34
③英語の授業は楽しいですか?	10	15	2	1	6	34
④簡単な英語を使って、自分の思いを相手に伝えたいですか?	13	10	2	3	6	34

アンケートの質問②「これからの将来、英語は必要だと思いますか？」では、34名中27名が肯定的な回答をしていることから英語科を学習する必要性は児童も感じていることがわかる。しかしながら、質問①③④からわかるように、必要だと感じているが英語に対する関心や積極的に学ぼうとする意欲は高くないように捉えられる。また、「△あまりあてはまらない」や「×あてはまらない」に記入した子どもたちに話を聞いてみると、「間違った英語を話すのが恥ずかしい」や「発音が正しくできるか心配」という意見があった。なお「無回答」の子どもたちについては、個々の課題を抱えている背景がある。

アンケート結果からもわかるように、必要性は感じているが学びに結びついていかない児童や自尊感情が低く物事を否定的に捉える児童いる。そこで、ニュージーランド(以下「NZ」と表記する)の児童との交流を通して、これまで学んできた学習が生きる実感を味わってほしい。そして、会話から相手の感情を受け取ったり、相手に伝えたいと思う自分の感情に気づいたりしながら国や人種の垣根を越えて人と関わることのよさを感じてほしいと願う。さらに、人との関わりに喜びを感じたり、多様な見方や考え方に触れたりしながら豊かなコミュニケーション能力を育てていきたいと考える。

6 単元について

(1)教材観

児童はこれまでの英語活動で、英語での簡単なあいさつや歌、英語を使ったクイズ、ゲーム、劇遊び、身近な生活場面を設定し、それにかかわる英語表現を使った活動、異文化に触れる活動などを行ってきた。本単元では、児童一人ひとりが、自分の将来の夢について考え、これまでの既習表現の中から言葉を選んで自分なりの伝え方で様々な人と関わり交流を行う。

将来の夢を伝え合うことは、夢をもつことのよさや夢を交流することの楽しさ、素晴らしさを体験することができ、児童にとって興味・関心が高まり、価値のあるコミュニケーション活動ができると考える。そのため、コミュニケーションへの意欲を育むことができる効果的な単元であると考え。

(2)指導観

本単元の指導観にあたっては、以下の3点を重要視して指導を行うことにする。

- ①豊かなコミュニケーション能力について
- ②対話力・語学力について
- ③人との関わりを通して成長することについて

“What do you want to be?”や“I want to be a ~.”の表現を用いて、どのような職業に就きたいかを尋ねたり、答えたりすることで、自分の考えを伝えようとする態度を育てる。積極的に自分の将来の夢などについて交流する活動となるよう、なぜその職業を選んだかという理由を答えられるよう指導する。理由を考えることで、“I want to be a ~.”という表現の内容が、より児童の思いが伴った表現になるだろうと考える。その際に、他者の職業を尊重する心も育つよう指導を行う。

また、本単元のゴールを「NZの友だちと将来の夢について伝え合おう」と設定し、実際にNZの児童との会話することを通して、これまで学習した内容が生きる喜びを実感させ、これからも英語を学びたいという意欲を高めていくことを期待する。

本市は、教育課程特区の指定を受けており、外国語は英語として専科教員が学習を進めている。そのため、系統的な英語学習の積み上げができている。また、本市では以前からホッケーを通じてNZとの関わりが継続的に行われている。さらに、本校のALTの出身がNZであることから、NZのLytton High Schoolとの連携を図り交流することとした。

児童にとって、海外に住んでいる同世代と交流することは、異なる言語を話す人々やその文化に対する好意的な態度につながりやすく、相手が話していることを理解するためにも、自分が話したいことを理解してもらうためにも英語が必要であることを実感できるのではないだろうか。

「自分の英語が通じた」という体験を通じて英語学習の喜びや楽しさを感じるとともに、「英語が話せる理想の自分」を具体的にイメージできるようになると考えられる。また、Microsoft TEAMSやZOOMなどのウェブ会議ツールやタブ

レット端末を活用した国際交流も現在可能になっている。タブレット端末を活用することで、少人数のグループ同士や一対一で会話にチャレンジするスタイルの交流もできるようになり、より質の高い英語を学びたいと強く思う意欲も向上するだろう。以上のことから、日常的に海外の人々と接することが少ない児童が学習するうえで、オンライン国際交流の効果や重要性は高まることが考えられる。

7 単元計画

時	学習活動	学習内容	評価規準 (評価方法)
第1時	・職業を表す単語に慣れ親しむ。	① 小学生の将来なりたい職業ランキングを調べ、様々な職業の英語表現を知る。 ② 自分が将来就きたい職業の英語表現を知る。	【知・技】 自分が将来就きたい職業を話している。〈行動観察〉
第2時	・職業を表す単語を聞いたり話したりする。 ・就きたい職業について尋ねたり答えたりする。	① 様々な職業の英語表現を発音する。 ② “What do you want to be?”, “I want to be a ~.”, “Because ~.” の英語表現に慣れ親しむ。	【学・人】 簡単な語句や基本的表現を用いてお互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。〈行動観察〉
第3時	・就きたい職業について尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 ・相手に伝わるように、工夫して自分の将来の夢などについて紹介する。	① 様々な職業の英語表現に慣れ親しむ。 ② “What do you want to be?”, “I want to be a ~.”, “Because ~.” の英語表現に慣れ親しむ。 ③ 友だちに「夢インタビュー」をする。	【思・判・表】 簡単な語句や基本的表現を用いて聞いたり伝え合ったり話したりしている。〈やりとり〉
第4・5時	・自己紹介の方法を考える。 ・グループごとにNZの生徒に尋ねたいことを考える。	① 自己紹介の方法について考える。 ② グループごとに質問を考える。	【学・人】 英語の背景にある文化に対する理解を深めようとしている。〈行動観察〉
第6時	・NZの生徒と英語で交流する ①	① 日本とNZでお互い自己紹介する。 自己紹介: My name is _____. Please call me _____. I like / I can / ② グループごとに質疑応答を行う。	【思・判・表】 簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分のこと(将来の夢など)を伝えたり、相手のことをよく知ったりすることができる。〈やり取り〉

第7時	・就きたい職業について尋ねたり答えたりする表現の確認をする。 ・グループごとに3ヒントクイズを作成する。	① “What do you want to be ?”、“I want to be a ~.”、“Because ~.”の表現を確認する。 ② 「日本の人気の職業」について調べ、3ヒントクイズを作成する。	【思・判・表】 簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分のこと(将来の夢など)を伝えたり、相手のことをよく知ったりすることができる。〈やり取り〉
第8時【本時】	・NZ の生徒と英語で交流する ②	日本と NZ のグループ同士で将来の夢などについて伝え合う。	【思・表・判】 簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分のこと(将来の夢など)を伝えたり、相手のことをよく知ったりすることができる。〈やり取り〉 【学・人】 簡単な語句や基本的表現を用いてお互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。〈行動観察〉

8 本時の目標

これまで学んできた表現を生かして、NZ の生徒たちに将来の夢などを伝えることができる。

9 本時の展開

学習活動	学級担任の支援　○指導上の留意点	評価規準 (評価方法)						
1　Greeting	・笑顔で元気にあいさつすることで楽しい雰囲気を作る。							
2　Small Talk	・ALT と JTE と Small Talk を行い、本時のねらいを捉えさせる。 ・将来の夢などについて話したり尋ねたりする方法や、簡単な語句、表現方法などを確認する。 ・発音ができていない場合は繰り返し練習させる。(ALT)							
3 Today's Goal	これまでに学んだ表現を使って、NZ の子どもたちに将来の夢などを伝えよう。 ○よりよいコミュニケーションのポイント(smile, clear voice, eye contact, gesture)を確認する。							
4 Communication	・ZOOM で NZ の学校 (Lytton High School) とつなぎ、グループごとに交流を図る。 ※グループ交流の内容 (全5グループ) <table><tr><th>Japan</th><th>New Zealand</th></tr><tr><td colspan="2">Greeting</td></tr><tr><td> グループごとに交流 What do you want to be? I want to be a____. Because_____. ※3ヒントクイズ 日本で人気な職業について ①グループごとに英語で出題 </td><td> I want to be a____.(※日本語) Because_____.(※日本語) What do you want to be? ②解答(※日本語) </td></tr></table> ○スムーズにネットワークがつながるように事前に準備をしておく。 ○英語を聞き取ることが難しかったり、応答の仕方が分からなかったりすることが予想されるため、ALT や JTE のサポート体制を整えておく。	Japan	New Zealand	Greeting		グループごとに交流 What do you want to be? I want to be a____. Because_____. ※3ヒントクイズ 日本で人気な職業について ①グループごとに英語で出題	I want to be a____.(※日本語) Because_____.(※日本語) What do you want to be? ②解答(※日本語)	【思・判・表】 ○簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分のこと(将来の夢など)を伝えたり、相手のことをよく知ったりすることができる。〈やりとり〉 【学・人】 簡単な語句や基本的表現を用いてお互いの考えや気持ちなどを伝え合おうとしている。〈行動観察〉
Japan	New Zealand							
Greeting								
グループごとに交流 What do you want to be? I want to be a____. Because_____. ※3ヒントクイズ 日本で人気な職業について ①グループごとに英語で出題	I want to be a____.(※日本語) Because_____.(※日本語) What do you want to be? ②解答(※日本語)							
5 Feedback	ONZの子どもたちと交流する中で気づいたことや感じたことなどをグループ同士で話し合い、グループごとに発表を行う。(意見交流) ○ワークシートに今回学んだことのふり返りを書かせる。							

※NZ の子どもたちが交流の中で英語ではなく日本語で応えることについて

NZ の Lytton High School では、日本語を学んでおり、NZ もこれまで学んできた学習を生かす機会であるため。

自立活動学習指導案

日時：令和3年11月12日（金）5校時

場所：なかよし学級 3組

児童：7名

指導者：岩崎 岡田 清水

1 単元名 交流学級のみんなに自分のことを伝えよう

2 単元の目標

- 友だちと協力して活動する。
- 交流学級のみんなに、自分のことをわかりやすく伝える。
- 相手を意識した計画・準備・進行ができる。
- 場や相手に応じて、コミュニケーションを円滑に行う。

3 個人の単元目標【別紙】

4 指導にあたって

（1）単元について

①自立活動の実態と指導の工夫・意図

なかよし学級では、教科の学習だけでなく、生活に必要な力などをさらに伸ばすために、それぞれの児童に合わせた生活単元学習や自立活動の時間を週2回以上行っている。今年度は、なかよし学級での1年生を迎える会や野菜の世話や収穫など、数回なかよし学級全員で集まることがあった。しかし、コロナ禍であるため、26名が一斉に集まることは、例年に比べると少なくなっている。

「交流学級のみんなに自分のことを伝えよう」の学習では、自立活動の一つとして行う。これまでから、交流学級や特別支援学級での日直や給食、そうじなどの生活全般を通してだけでなく、児童一人ひとりの障がいの種別に応じた課題に合わせた自立活動を行っている。本単元は、自閉症・情緒障害学級と肢体不自由学級に在籍する4～6年生が行う。少人数で計画から準備、リハーサル、交流学級のみんなの前で発表という一連の流れを経験し、自分のことを交流学級の児童に知ってもらうことを目標に設定している。

今回題材設定では、児童らが中心となって会を進める経験を積むことを重点の一つにしている。コロナ禍以前は、市内の特別支援学級児童との交流会や中学校区における交流会など、児童が大勢の前で話す機会があったが、コロナ禍になり減少している。また、なかよし学級で集まることも少なく、児童らが中心となって活動する経験が乏しくなっている。以前交流会等で発表をしたときには、本番に向けて練習を重ねることで、自信をもって発表でき、達成感を得ることができた。安心して取り組める環境を設定し、実践を重ねることで自信をもち、自分のがんばりを認める体験を積み上げられるようにしていきたい。

②交流学級での発表でつきたい力

発表する対象を活動する児童7名の交流学級4クラスに設定している。7名は交流学級で学習することが比較的多く、今までに交流学級の児童との関わりはあるが、交流学級においては、控えめであったり、自分の意見や好きなものを知ってもらう機会が少なかったりする児童が多い。この発表

を機会に自分のことを知ってもらい、がんばる姿を知ってもらうことで、交流学級とのつながりが深まることを期待している。また、発表する側にとっても、大人数の前で発表する経験ができ、最後までやりきることができたという達成感から自信につながると考えている。また練習においては、動画を通して自分の様子を客観的に見て、回数を重ねることによって成長する自分を認識することができ、自己肯定感を高めることができると考えている。

③タブレット端末に関わる使用の実際

今年度より本格的に始まった1人1台端末の取り組みは、特別支援学級の児童にとっては自分の得意な分野で活躍できる場であったり、自分の苦手な部分を助けてくれたりする利点がある。一方で、操作方法や思い通りに動かなかったりしたときの対応が難しかったり、システムの個々の発達段階に合わせたアプリ等の自由な活用ができなかったり、などの課題もある。まずは、自分が楽しみながらタブレット端末を使えるようになり、便利さや使用の幅の広さを実感できるようにし、タブレット端末に対しての苦手意識の軽減や有用性の認識を目的としている。

④学習指導要領での位置づけと指導の目的

本題材は、タブレット端末を活用した発表会を開き、自己紹介やクイズの出題などを通して、運営の技能や自分のことや気づいたことについて相手に伝える力を身に付けさせたい。これらは、特別支援学校小学部学習指導要領における、自立活動の内容、「3 人間関係の形成」の(3)「自己の理解と行動の調整に関すること」と「5 コミュニケーション」の(4)「コミュニケーション手段の選択と活用に関すること」と(5)「状況に応じたコミュニケーションに関すること」を指導内容とする。

自分の好きなものや得意なことについて認識している児童が多いが、それを他の人に伝える経験が少ない。その原因として考えられるのが、「どのように伝えようか方法が分からないこと」や「うまくできるか不安であること」が挙げられる。今回は、自分について紹介する方法として、児童が楽しみながら取り組めるクイズ方式を用いる。また、本時のリハーサルを撮影し、自分で確認することで客観的に自分の様子を見ることができるようにした。教師や仲間と確認することで、自分が意識すべきところが明確になり、よりよくするためにはどこに気を付けるかを具体的に改善することができるようになることを期待している。

コミュニケーションについては、語彙の少なさや状況を認知する力の弱さから、自分の気持ちや要求を適切に相手に伝えることが苦手な児童が多い。それらに対して、さまざまなコミュニケーションの手段があることに気づき、適切な手段を選択・活用して意思伝達できる経験を設定する。話し合う時間では、否定的な表現でなく、「～を〇〇にするとよくなる」などの肯定的な意見の伝え方などを意識して指導・支援をしていきたい。友だちと協力してさまざまなやりとりをする体験を通して、コミュニケーションスキルを高めていくことを期待している。

(2) 児童について

本校の特別支援学級（なかよし学級）は、知的障害学級2学級、自閉症・情緒障害学級2学級、肢体不自由学級1学級、難聴学級1学級の計6学級で計26名の児童が在籍している。学年や発達段階に大きな差があり、個々の課題がさまざまであるため、支援の在り方についても、交流学級で多くの時間を過ごす児童もいれば、なかよし学級での学習が多い児童もいる。児童一人ひとりの実態を的確に把握して、それぞれの課題克服に向けて学習内容や支援方法等を工夫している。

GIGA スクール構想により、今年度より本格的に1人1台タブレット端末を使用する学習が始まった。1学期から基本的な操作を学び、ベネッセの学習支援ソフト・ミライシードの「オクリンク」を中心になかよし学級や交流学級で繰り返し使用してきた。タブレット端末の使用に対して、取り組みやす

さや楽しさを感じている児童がいる一方で、うまくつながらなかったり、操作の仕方が分からなかったりして苦手意識をもっている児童もいる。本単元では、操作に対しての苦手意識を克服し、中心となって活動する力を身に付けさせたい。また、自閉症・情緒障害学級と肢体不自由学級の4～6年生での活動で、交流学級のみんなの前で発表することに抵抗感がある児童もいる。自分の好きなことに関わる内容であることや視覚的な支援があること、リハーサルを実施すること、交流学級4クラスで繰り返し同じことを実施することを通して、経験を重ねることができ、自信につながると考えられる。

(3) 指導について

指導にあたっては、次の工夫を行う。

- ルールや話し方、説明の仕方、タブレット端末の使い方等を示した掲示や個人シートを使い、一人ひとり主体的に活動できるようにする。
- 今回は、タブレットを使用することが多くなる。そのため、タブレットを使うときや話を聞くと、自分が話すときなど切り替えができるようにルール作りや声かけをする。
- 個の実態にあつためあてを設定し、スモールステップで適切な指導・支援により達成感を得ることで、自己肯定感を高めていく。
- 自分の意見が活用されたり、自分が作った問題や説明で他の人が喜んだり、楽しんでもらうことで自信をもち、自己有用感を高める。
- 教師が良いモデルを示したり、肯定的な発言をしたり、児童の肯定的な発言をほめたりすることで、安心してコミュニケーションをとれる雰囲気を作る。
- 他の人とのかかわりやコミュニケーションの基礎に関する指導を中心に、絵や写真、動画などの視覚的な手がかりを活用しながら相手の話を聞くことや、タブレット端末等を活用して自分の話したいことを相手に伝えることなど、個々の課題に合わせてさまざまなコミュニケーション手段を用いる。

5 単元の指導計画(全10時間)

時	学習活動	内容
第1次 (1時間)	「オクリンク」のいろんな使い方を 知る。	今まで経験した「オクリンク」のカード機能やカメラ・ 動画機能のいろいろな使い方をふり返し、共有する。
第2次 (4時間)	交流学級での発表会を計画・準備 し、よりよくする方法を考える。	・発表会の目的をはっきりし、そのために第1次の内 容を参考に、クイズを考える。 ・自己紹介について、ひな形を元に作り、練習する。 ・セリフなど必要なもの準備し、協力して説明の仕方 を考え、練習する。 ・自分の担当の部分については、動画撮り、確認す る。
第3次 (1時間)	発表会のリハーサルをする。	・本番の司会・進行を実際に行い、動画で撮影し、よ い点と改善点を見つける。(本時)
第4次 (1時間)	前時の気付きをもとに、よりよい発 表会になるように考える。	・具体的にどのようにするとよいか考え、実際に練習 をして、調整・改善する。 ・必要に応じて、再度動画を撮影する

第5次 (15分×4 クラス)	交流学級で自分のことを伝える。	・5校時前の「さんさんタイム(15分)」を活用して、 交流学級で自分について伝える。 4年2組→5年1組→5年2組→6年2組 ・毎回動画を撮る。
第6次 (1時間)	ふり返しを行い、がんばったことを 発表する。	・発表会をふり返し、まとめをする。 ・4回分の本番の動画を一部比較する。

6 本時の学習(6/10時間)

(1) 本時の目標

- ・相手を意識した発表ができる。
- ・自分や仲間の様子を動画で客観的に見て、本番に向けて工夫すべき点を考えられる。
- ・よりよくなる提案を適切な言葉づかいで伝えることができる。

(2) ICT を活用して期待する効果

- ・タブレット端末や電子黒板を使って、より分かりやすく伝えることができる。
- ・自分を客観的に観察することで、新しい気づきができる。
- ・動画の一時停止や繰り返し機能を活用して、確認しやすく、具体的なイメージをもつことができる。

(3) 本時の展開

学習活動	指導にあたっての留意点	準備物
1. 本時の流れを確認する。 ・めあてを声に出して読む。	・本時の流れを全員で確認する。	電子黒板 動画撮影用タブレット 動画転送用機器 個人用タブレット 黒板に貼れるホワイトボード
発表会のリハーサルから、よいところやもっとよくなる方法を見つけよう。		
2. リハーサルを行う。 ・6つの意識するポイントを確認 ・	・必要に応じて、教師は補助・助言はするが、できる限り児童のみで行う。 (時間短縮、一部分省いて行う。)	
3. 自分たちの動画を見る。	・2. で出した6つのポイントを伝えてから、いくつかの場面程度に分けて動画を確認する。注目すべき部分に絞って、動画を止めたり、電子黒板に印をつけたりする。	
4. 2人か3人で、動画を見て、気づいたことを話し合う。	・6つのポイントや印した部分を意識させる。 ・よかったところやよりよくなる方法見つけが目的であることを確認する。	
5. 気づいたことを全体で共有する。 (3. 4. 5を場面ごとにくり返す。)	・改善すべきところが否定的な表現にならないように、見本となる表現を示す。 例:「顔をあげるともっといいと思います。」	
6. ふり返りをする。 ・全体→個人	・全体でよかったところを確認し、個人については、タブレット端末を使用して、各自のふり返りを行い、提出させる。 ・指導者が次回の内容・目的について伝える。	

教科の学習で情報活用能力を育成する

～総合的な学習の時間等を活用した実践について～

ダイジェスト(概要)

大阪市小学校教育研究会視聴覚部(視聴覚部)はこれまで、情報活用能力の実践力を育成する取り組みを行ってきた。今回は 6 年生の総合的な学習の時間の取り組みの中で国語科とも連動したパフォーマンス課題を設定し、児童が情報活用能力を習得した技能を習熟させていく実践について紹介する。

【キーワード】 教科横断的 情報活用能力 国語科 総合的な学習の時間

1. 実践のねらい

視聴覚部では児童が学年ごとのカリキュラムに位置づけられた学習の中で、資質・能力となる知識・技能をどの教科で習得し、どんな場面で活用・発揮すれば習得した定着ができるかについて研究を進めていた。

昨年度は 6 年生で行ったアンケートの結果、「自分の考えが伝わるように、資料を活用するなど、表現を工夫する」ことが苦手という課題が見られた。そのため、総合的な学習の時間で取り組んでいた「まちの魅力を発信しよう」という取り組みの中で国語科で習得した技能を活用し、課題となる技能を習熟させようと考えた。

2. 実践の方法・流れ

総合的な学習の時間「まちの魅力を発信しよう」

番組「ドスルコスル」の視聴後に「自分たちが住むまちとはどんなまちなのか」という視点で意見交流を行なった結果、「自分たちが住むまちについて調べよう」という課題意識を持って調べ学習行うことになった。アンケートや zoom を用いた遠隔交流、ブラウザ検索や資料を用いて調べる活動を番組「プロのプロセス」を活用して行った。調べた内容は LINE のチャットボットが作成できる「prograchat」というプログラミング教材を活用し、調べた内容を発信することとなった。

国語科「世界に目を向けて意見文を書こう」

フェアトレードに関する意見文を書かせるにあたり、教材文の分析を行った。番組「読み書きのツボ」を視聴し、文章の書き方を確かめた。また、タブレット端末にインストールされているスカイメニュークラスのプログラミング機能を活用し、資料から収集した情報を整理、思考の流れを図式化させた。

「習得した技能を活用し、習熟させる時間」

総合的な学習の時間で活用することを伝えた上で指導者が作成した架空の公園のパンフレット提示した。公園の魅力を限られた文章量で紹介するには、どのような情報が必要なのか、情報収集と文章構成と文章作成、課題の解決を行った。全体で文章を交流していく中でどの文章にも地域の人の工夫や思いが入っていることを確認し、学習をまとめることができた。学習後はその後の学習に意欲を持ち、「早く文章をプログラムしたい」と言う児童や資料を調べなおし、地域に住む人々が町を盛り上げようとする工夫を見つけようとする児童が見られた。

3. 実践の結果・考察

「prograchat」はプログラミング画面がフィルタリング対象となっていたため、チャットボット作成には至らなかった。しかし代替で作成したポスターには、収集した情報から地域の人びとの工夫や思いを整理し、文章にまとめることができていた。成果は番組を活用したことで、活動にイメージを持たせることができたことや、パフォーマンス課題を設定することで児童はより主体的に他教科で習得した技能を習熟できたことではないかと考える。一方課題として、児童がより主体的に情報を活用できるように活動内容を精査することや効果的な NHK for School の活用方法を検討する必要があるのではないかと考える。

4. 今後に向けて

今年度より一人一台学習者用端末が全市に整備され、活用が進められている。これまでの実践を生かし、個別最適な学びや協働的な学びを通して、教科の学びはもちろん、情報活用能力育成を目指した取り組みにも関わっていこうと考える。

視聴覚機器の効果的な活用の仕方

PowerPoint を活用した教材研究

ダイジェスト(概要)

デジタル教材を見童に提示するのは、一種のプレゼンテーションであり、プレゼンテーション用として、最もよく使用されているソフトウェアの PowerPoint を使用した。PowerPoint で作成したデジタル教材を作成した。

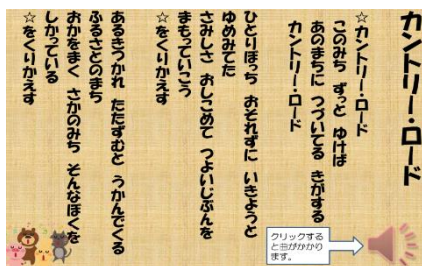
[キーワード] PowerPoint 視覚支援 教材研究

1. 実践のねらい

多忙な業務の中で、できるだけ時間をかけずにデジタル教材を作成できることが求められる。そのためには、操作が簡単と思えるソフトウェアを使ってデジタル教材を自作することが必要である。教員ができるだけ負担をかけずにデジタル教材を作成することを目的として研究を行った。

2. 実践の方法・流れ

①朝の会等における歌と歌詞の提示の一元化



音源と歌詞カードを同時に開くことができるように PowerPoint に一元化することによって、日々の提示する作業が簡略化された。

②低学年における生活指導での視覚支援



登校後や、給食を食べ終わった後の手順を示した。また、給食の準備の仕方の指導の際には、事前に2年生の準備の様子を撮影し、動画を見せた。

③学習における教材の提示

国語科

第4学年の慣用句の学習では、イラストを交えた PowerPoint を作成し、導入時に活用した。クイズ形式にすることにより、意欲的に学習に臨む児童の姿がみられた。

算数科

教科書をスキャンし、PowerPoint に組み込むことで、見せたい場所を絞って提示することができた。

音楽科

の場所をクリックすると、音楽が流れるようにパワーポイントを作成した。教科書の挿絵と音楽が対応しているの、流したい音源を素早く選択することができる。

3. 実践の結果・考察

PowerPoint による提示は視覚支援が必要な児童にとって、非常に有効であったと考える。教科指導だけでなく、和式トイレの使い方などの生活指導においても有効であった。共有フォルダに保存し、学年間で共有することで、指導を統一することができた。また、紙媒体の資料を削減することにつながった。

4. 今後に向けて

視聴覚機器は、日々発達し児童の課題の把握、表現補助など多くの面で有効な手段となっている。また、指導者側にも教材の共有、黒板に書きだす時間の短縮などメリットも多い。しかし、指導者が新しくなっていく機器に苦手意識をもっている場合がある。視聴覚主任が率先して技術や知識を学び、効果的な方法などの研修や講習会を行う必要がある。

1. 本実践が明らかにしたことと効果

提案者の岸本先生は、1年生を担当した時にその有効性を実感したことをきっかけに取り組んだ、PowerPointを使った効果的な視覚支援教材の開発について発表されました。多くの先生方には、学校教育活動における視覚支援の有効性は、改めて説かずともご理解いただけると思います。しかし、操作が苦手だった私は、パソコンを使って作成するほうが、さらに時間がかかってしまうため、仕方なく、実態に合わない、分かりにくい資料を使ったり、つい準備を諦め、言葉のみの説明で理解させようとしてしまったりと、苦い経験があります。

今回、岸本先生の発表を聴かせていただく中で、PowerPointを使った様々な提示方法があること、少し手を加えるだけで他に応用がきき、伝えたい情報に合わせたシートに作り替えることができるということを知り、大変驚きました。そして、この教材を使って学習した子どもたちの、「分かった!できた!」という声が聞こえてくるようでした。私自身も含め、本校の先生方にも、ぜひ取り組んでいただきたいという思いになりました。

もう一つ、魅力に感じたことは、教師の働き方改革につながったという点です。ひとつ作成すれば、いつでも、だれでも、好きな時間に利用できるということです。かつては、同じ時間に多学級で活用したい資料があった場合、同じものをいくつも作成して掲示したということがありました。

また、応用がきき、作り替えがしやすいため、提示資料を目的に合わせてすぐに作成することができて、学習準備にかかる作業時間の短縮が図れます。さらには、用紙やトナーの削減にもつながったという点が評価できます。PowerPointの利点がよく伝わってきました。

2. 今後への期待

ただ、岸本先生も述べられているように、課題は先生方の技能面です。作成方法の習得やどのような資料を作ればよいかについては、ひとりでは解決することが難しい場合もあります。そのときは、やはり、視聴覚主任や知識および技能のある先生が主となり、校内研修等でご教授いただきたいです。さらには、作成されたものから少しだけ内容を変えれば、必要な教材が作成できるテンプレート的なものを残していただいたりすることも必要かと思います。

データの共有という面では、他校の教員が相互に活用できるような仕組みを作るなど、さらに利用における有効な手立てを考えられそうです。岸本先生の実践が、その第一歩となっていくであろうと期待しています。

また、岸本先生の実践の中で、すでに考えられていたことと思いますが、視覚情報の活用場面と時間の配慮も必要になると思いました。写真や文字の大きさと配置、提示のタイミングや長さで、児童の集中力が左右されることがあるかもしれません。「効果」を活用して強調することで、静止画のように、どこに注目すればよいか分からないということはなくなるとは思われますが、常に変化する画面に注目させ続けるという場合、長さなど配慮する必要がでてくるのではないかと思います。

彦根市では、一人一台ずつ配布されたタブレットを効果的に活用した授業を推進しています。これからは、教師が一方向的に提示するのではなく、自分が得たい情報を、好きなタイミングで得られるような学習教材を用意する必要も出てきています。そのような場合もPowerPointをうまく活用できるのではないかと、実践発表を聴かせていただき、期待が高まりました。今後も取組を続けて、ぜひ広めていただきたいと思います。

貴重なご提案、ありがとうございました。

一人の百歩より、みんなの一步を

GIGA スクールを学校に定着させるために

奈良県では、昨年度県一斉調達によって、全ての児童生徒・教職員に google アカウントが付与され、一人一台の Chromebook が配備され、教育研究所において、Google Workspace for Education(以下 GWfE)、ロイロノートなどの全県的な研修もスタートした。本研究では、児童に Chromebook や GWfE の使用を定着させ、日常使うための取組について報告する。

[キーワード] GWfE、Chromebook、コラボレーション、playgram

1. 実践のねらい

昨年度奈良県では県の一斉調達により、GWfE、Chromebookが配備され、教育研究所での研修も始まった。

「密」を避けるための GoogleMeet による全校朝会や儀式的行事の運営も定着し、児童が保管庫から Chromebook を出して Web で調べ物をする姿も日常的なものになりつつある。

しかし、Chromebook を使って、例えばロイロノートを使って調べたこと、考えたことを自分でまとめていく作業や、自分の学びを、Jamboard でコラボレーションしていく活動までは至っていない。そこで、日常的にコンピュータを使うことで、スキルアップを図り、学びのツールとしてコンピュータやネットワークを使う方法を考察していくことにした。ここでは本校 4 年生での実践を中心に述べる。

2. 実践の方法・流れ

1. 日常的にChromebookを使うために

児童用のコンピュータが配備されたのが約 20 年前、その後教室に教員用の PC とプロジェクターが配備されるようになり、デジタル教科書や NHK for school など教材提示用の活用が主であった。児童にコンピュータを使わせるには、使い方を教え、習熟させる時間が必要であること、windows マシンは、環境保持のソフトやアンチウイルスソフトで起動が遅いこと、コンピュータ教室に行くことや授業時間を使ってコンピュータに習熟させる時間を作ることが

難しく、利用が進まなかった。

2. 児童がChromebookを使えるようにするために

教室で使えることにより、すきま時間や雨天時外に行けない時、コンピュータが使えるようになった。この時使うようにしたのが、playgram (<https://playgram.jp>) で、キーボード練習をさせることにした。同様のサイトは他にもあるが、基礎に重点が置かれ、意欲的に進めることができた。

3. コラボレーションツールとしての GWfE

コロナ禍が教育現場に与えた影響として、グループ学習で行っていた、face to faceでの学習形態が困難になったことがある。グループでの討議や協同は、「総合的な学習の時間」を基盤として、ロイロノート、Jamboardによる討議、slide などによるプレゼンテーションなどで、今までどおりの学びを保障し、新しい学びにつないでいる。

3. 実践の結果・考察

教室で使うことで、キーボードに習熟することができ、限られた時間の中、自分の学びをまとめていくことができた。今まで、習熟のためにコンピュータ教室での時間を使うのがもったいないと思い、力がつかないので、コンピュータは調べるための道具でしかなかったが。ようやく思考の道具になったといえるだろう。

4. 今後に向けて

みんなの実践になるまではまだ「広げる」にはいたっていない。定着のためには市や県の部会での交流、研修の実施、ICT 支援員の連携などが必須である。

児童用タブレットを活用した授業づくり

北野たんけんたい～北野のすてきを見つけよう～(3年生)

ダイジェスト(概要)

児童用タブレットを活用し、他校の仲間に調べたことを伝えるという相手意識・目的意識を持って学習を進めていく授業づくり。

[キーワード] 児童用タブレット・他校の友だち・相手意識・目的意識

1. 実践のねらい

- (1) 校区のよさを追求することで地域への愛着を深めるとともに、進んで地域とかかわっていかうとする。
- (2) 情報を収集したり整理・分析したりする活動を通して、自分たちの校区のよさに気付く。
- (3) 学習したことを相手や目的に応じて適切に伝える。

をまとめる。

第三次

⑩「北野のすてき」を中主小学校の友だちにどのように伝えるか考える。

⑪～⑰「北野のすてき」大地図を作成する。

⑱～⑳グループごとの発表準備をする。

㉑～㉔グループの発表を見合い、意見交流、発表の改善を行う。

㉕ リハーサルを行い、意見交流、発表の微修正を行う。

第四次

㉖㉗ 中主小学校との発表の交流、振り返り

2. 実践の方法・流れ

校区の探検を通して見つけた「北野のすてき」について、大地図やミニ劇、ペープサートやクイズ、紙芝居にしてまとめていった。それを、本校の隣町にある中主小学校の同学年の児童に向け発表し、自分たちの校区の良さを知ってもらおう、という相手意識や目的意識を持って発信できるよう取り組んでいった。

児童用タブレットについては、今年度5月に、各教室の高速無線LANの整備とともにその利用環境が整ったばかりである。本学習においては、Teamsを利用して中主小学校とオンラインで結び、調べたことの発表を交流し合った。そして、発表に向けての取り組みの中で、児童用タブレットの撮影機能や動画再生機能を利用して、よりよい発表を児童たちの手で作り上げていった。

〈学習の流れ〉全27時間

第一次

①これまでの経験をもとに「北野のすてき」を出し合う。

第二次

②～⑨ 北野小学校から4方向に探検し、気付いたこと

3. 実践の結果・考察

他校の友だちに向けて自分たちの校区のよさを知ってもらおうという相手意識や目的意識を持ち続けながら、校区探検から発表まで取り組むことで、主体的に学習を進めていくことができた。また、自分たちで発表の内容や方法についてどんどん工夫していくことができた。ICT活用によって、遠隔地とオンラインでつながる、撮影・動画再生機能を利用して客観的に自分の姿を見つめる、といったことが学習の中で可能となったことが大きい。

4. 今後に向けて

他校児童とのやり取り以外にも、地域の施設や他県市町の工場などともオンラインでつながり、双方向のやり取りを通して相手意識や目的意識を持って学びを深めていきたい。また、撮影・動画再生機能を利用して自己を形成的に評価していく活動も取り入れていきたい。

1人1台タブレット端末で「教える場」から「学ぶ場」へ

学習活動ソフトとオンラインアプリケーションを併用したGIGAスクールたんばモデルの実現

ダイジェスト(概要)

兵庫県丹波市も GIGA スクール構想の実現に向けたICT環境整備が行われた。導入された SKYMENU Class と Google Workspace for Education の効果的な活用を研究し、学校を「教える場」から「学ぶ場」へと変えることを目指している。

[キーワード] SKYMENU Class Google Workspace for Education

1. GIGAスクールたんば推進のねらい

兵庫県丹波市では、タブレット端末を様々な場面で活用できるように SKYMENU Class (スカイ)・Google Workspace for Education (グーグル)・タブレットドリル(東京書籍)・スクールライフノート(エデュコム)と複数のアプリケーションが導入されている。導入初期は、主に SKYMENU Class と Google Workspace for Education を活用している。これらのアプリケーションは、機能が似ており、教員からすると操作方法など2種類について覚えなないといけなことがデメリットと思われる。小学校6年間の児童の発達段階を考えるとこれら2種類のアプリケーションを学年やねらいにより使い分けることで、丹波市内の全小学校において、GIGAスクール構想の実現が効果的に図られるものと考えている。

2. 具体的な実践例

(1) SKYMENU Class を活用した実践

大路小	授業	1年 生活科「あさがおの観察」	SKYMENU「発表ノート」
 ・生活科のあさがおの観察では、タブレットであさがおを撮影し、SKY MENUの発表ノートを用いて観察記録を行った。 ・全体指導では、「写真撮影の仕方」「トリミングの方法」「サイズ調整やレイアウトについて」「文字入力(手書き)」についてを行った。 ・撮影した写真は拡大することでもできるため、小さな葉の誕生に気づき、発表ノートにまとめている児童もいた。			
 あさがおの撮影準備をする		 撮影したあさがおを観察する	 気づいたことを入力する

(2) Google Workspace for Education を活用した実践

竹田小	授業	5年 総合的な学習の時間「自然学校のまとめ」	Google サイト
 ・6月に行った自然学校での活動や学びをGoogle サイトを用いてまとめ、全校生へGoogle meetを通して発表した。 ・活動日毎にグループ分けを行い、それぞれがタブレットを使って、作り上げた。文章だけでなく、写真も使いながらまとめることができた。 ・発表では、Google meetを使って全校生とつながりながら、作った サイトを見せながら、自然学校の学びを伝えた。			
 サイトの編集を行っている様子		 できあがったサイト	 全校生への発表の様子

前山小	授業	6年 国語「防災ポスターを作ろう」	Google Jamboard SKYMENU「発表ノート」
 ねらい：表現の効果について考えながら、読み手の興味を引くポスターを作成することができる。 ・「Google Jamboard」でポスター作成開始から完成までの流れを共有し、各班に分かれてテーマに沿った調べ学習をした。また、得た情報を付箋に整理した。 ・発表ノートの「グループワーク(と画面合体)」機能を活用しながら、グループでポスターのレイアウトを検討しながら作成を進めた。個人作業→適宜、班で検討といったサイクルで取り組んだ。 ・単元のまとめでは、完成したポスターを発表し合い、良い点(工夫されている点)や改善点について全体で共有した。			
 Google Jamboardで作成手順の共有&情報の整理		 SKYMENU「発表ノート」で意見を出し合いながらポスターにまとめていく。	 ポスターの完成報告会

3. 今後に向けて

学年が上がるにつれて、SKYMENU Class と Google Workspace for Education を効果的に併用していくことにより、学校が「教える場」から主体的で協働的探究的な「学ぶ場」に変わっていくと考える。今後も活用について研究を続け、GIGAスクールたんばモデルを確立させ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的となった令和の日本型学校教育の構築を目指したい。

クロームブックの利用と授業の工夫

～操作能力向上・リテラシーの向上・知識の構築～

ダイジェスト(概要)

ICT機器操作の上達と情報リテラシーの向上をねらい、クロームブックを使って高学年の授業改善をはかった。

[キーワード]

クロームブック・キーボー島・NHK for School・フローチャート

1. 実践のねらい

コロナ禍により、オンライン授業や在宅ワークが急速に進んだように、これからの時代、子どもたちはICT機器を使いこなしていくことが必須となってくる。本市では昨年度より全市の児童に一人一台のクロームブックが配備されており、さらにはパソコン、タブレット、スマートフォンなどを所有している児童が多い。そのため、生活や学習でICT機器を使いこなしているような気になっている子どもが少なくない。しかし、情報リテラシーが十分育っていないため、情報過多になって何でも情報を鵜呑みにしてしまったり、情報に対して自分の考えや判断ができなくなったりする子どもが増えるのではないかと危惧している。

そこで、小学校高学年を対象に、配備されたクロームブックを用いてICT機器の操作の上達と情報リテラシーの向上をはかり、ICT教育のねらいにせまる授業改善に取り組むことにした。

2. 実践

(1)「キーボー島」

クロームブックにマウスはなく、タッチパネルになっている。そのためローマ字打ちを基本とするキーボードの使い方を中心に指導をした。タッチパネルで操作はできるのだが、ローマ字の習得は検索の言葉を入力する際に必要であるとともに、英語の学習の基礎ともなるので、必須であると考えた。キーボードの指導には「キーボー島」というインターネットサイトを利用した。ネットサイトの利用の際には、IDとPWを管理することを教え、基本的な情報機器のモラルについてもこの場で教えることとした。

(2)「NHK for School」の活用

「NHK for School」は主に社会と理科で活用した。社会では、歴史人物については、楽しい動画になっているので、子どもたちの関心が高まるだけでなく、人物像や時代背景(服装や建物、生活様式)をイメージしやすい利点がある。また、理科の学習では、実際に観察したり実験したりができない学習内容について活用した。小学校段階の実験では、実験を成功させることが大切になってくるが、特に生物分野の実験は準備が難しかったり、成功

しなかったりすることが多く、実験動画を見て理解を深めるようにした。また、月や太陽の学習では、表面の様子や月の満ち欠けの様子など、普段なかなか見ることができない様子を映像で見ることで効果があった。

(3) diagrams アプリの利用

クロームブックの diagrams アプリでは、フローチャートを描くことができる。理科の水溶液の選別をフローチャートを使って行うことで、一連の思考の流れを視覚的に振り返ることができた。また、自分の意見がどのように発展したり、どのような問題を派生したりするのかを予め予測することができ、理科以外の教科でのアプリの活用の幅が広がるように思われる。

3. 実践の結果・考察

キーボードの操作技能はどの子も格段に上達した。授業の振り返りをパソコンを使ってするときも、時間がかからずに行うことができた。子どもたちもキーボードで操作する方がやりやすいと感じていた。「NHK for school」など動画の活用は、授業時間帯に縛られず繰り返し視聴することができるとともに、映像を駆使した工夫された内容は、授業では到底伝えられないものであり、大変有益であることを再認識した。フローチャートのアプリの活用は、思考を整理することに役立つだけでなく、プログラミング学習につながると感じた。

4. 今後に向けて

情報リテラシーは、情報の守り方や発信の仕方などたくさんある。それだけに指導は難しかった。簡単に手に入れられる多岐にわたる情報から、正しくて誰に対しても有益であるものを選択する能力は、何もICT機器を活用しているから大切なのではなく、あらゆる教科、授業で培わねばならない力である。各教科の授業を横断的に分析し、それぞれの学年や小学校段階でのリテラシーについて指導をするか体系的に考えることが大切であろう。もちろん、同時に社会的課題であるICT機器使用の際のモラルについても、常に指導を続ける必要がある。

子どもたちのスタートラインをそろえる
道徳科の授業づくりを目指して

～「構造的な板書＋(プラス)映像」～

ダイジェスト(概要)

道徳的価値に迫る「子ども主体の授業」の実現のために進めてきたこれまでの実践にプラスワンした。

「キーワード」道徳 住みよいマンション NHK ティーチャーズ・ライブラリー

1. 実践のねらい

私が目指す道徳科の授業は、子どもたちが本来もっているものを引き出しながら、心の中に育ってきている「豊かな心」に気付かせることができるような授業である。そのためには、子どもたちが考えたいくなる問いがあり、思わず話し合いたくなったり、自分ごととして捉えることができたりといった「子ども主体の授業」の実現が必要不可欠である。しかし、教材の内容把握ができず、話し合うためのスタートラインに立つことができない子がいると、わかりきった問いや手順の説明に時間が取られてしまう。その結果、道徳的価値に迫ることができなかつたり、事実ではなく「なぜ」を追求することができなかつたりする。存分に子どものもっているものを引き出したりすることができなければそれは「子ども主体の授業」とはいえないだろう。そこで、しっかり子どもたちのスタートラインをそろえてあげることが大切であると考えた。これまで構造的な板書の工夫をしてきたが、本単元「住みよいマンション」ではねらいである「目には見えない相手の立場や気持ちの理解」のために＋（プラス）映像を活用することが効果的ではないかと考え実践した。

2. 実践の方法・流れ

本単元「住みよいマンション」は

C-(12)規則の尊重〔第5学年及び第6学年〕法や
きまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他
の権利を大切にし、義務を果たすこと。
の内容項目である。騒音問題解決のために、マンション
内での問題に対してルールを作ることによって解決を目指し

ていた岡さんがルールを作るだけでなくお互いの関係づくりが大切だと新しく発見したことを通して「きまり」について学んでいく。子どもたちはこの学習の前にも「きまり」について A 節度、節制「ながらって」C 規則の尊重「通学路」にて考えてきている。本時の導入ではこれまでの学習での「きまり」についての価値観と比較できるようにし、より広い視野で「きまり」について捉えられるよう工夫した。展開の場面では、映像を使用することで動きや表情から登場人物の心情把握につなげ、現実性のある内容把握を目指した。



3. 実践の結果・考察

＋（プラス）映像を使用してみて、難しいねらいであったにもかかわらず子どもたちは教材の内容を把握し、「きまりを守ったり作ったりすることも大切だけど相手のことを知って仲良くし認めることも大切だ。」といった「きまり」についての道徳的価値に迫る姿が見られた。

4. 今後に向けて

- ① 効果的な「ゆさぶり」
- ② 1単位時間で個別に学習するのではなく、3時間で1つのパッケージにする
- ③ 全員の考えを引き出す ICT 活用（共有機能・アンケート機能）

道徳教育の実践

～iPad を活用して～

ダイジェスト(概要)

NHKの番組を含め、iPad のアプリ、「MetaMoji Classroom」の活用は、道徳性を養い、実践力を育む道徳科の学習に、大変有効であったと考える。

[キーワード] iPad、NHK for school、MetaMoji Classroom

1. 実践のねらい

私が今年度担任をする5年生は、単級で5年間ほぼ同じメンバーで過ごしてきた。そのため、男女関係なく大変仲の良い関係を築くことができています。しかし、自分の思いや考えを言いたいという前向きな気持ちをもって、クラスみんなに「自分の考えを分かってもらおう。」という思いで伝えている児童は多いとはいえない。また、友達の考えのよさを分かろうとする児童、自分の考えと友達の考えを合わせて、よりよい考えにしていこうとする児童は少ない。

道徳では、答えが一つではない道徳的な課題を一人ひとりの児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」への転換により、道徳性を養うことが求められる。今回の学習のねらいは、視覚的に捉えやすく、集中して視聴ができる、「NHK for school」や iPad の「MetaMoji Classroom」を活用し、自分の意見とは異なる意見をもつ他者と交流することを通して、道徳的価値を多面的・多角的に考えさせ、実践力に繋いでいきたい。

2. 実践の方法・流れ

NHK 番組「いじめをノックアウト」を視聴した。10 分間の動画を視聴後、自分たちの学校生活を振り返らせる。視聴する番組は、教師が事前に視聴し、児童が自分たちの生活で特に共感して考えられそうな内容を選んでおく。併せて内容に合わせたワークシートを「MetaMoji Classroom」を用いて用意する。ワークシートには、「自分はどちらの意見に賛成か。」や「クラ

スのためにできることは何か。」

などを書かせた。書いた内容は電子黒板で掲示し、クラス全体で共有し、話し合い活動につなげた。



3. 実践の結果・考察

今回、道徳科の学習で iPad を活用し、誰がどのような意見を持っているかを教師用端末で「MetaMoji Classroom」のモニタリング機能で一覧掲示したものをテレビで投影することで、異なる考えを簡単に共有することができた。また、児童の端末でも友達の意見を自由に見ることができるように設定することで、コロナ禍でペア学習やグループ学習が難しい中でも友だちの考えにじっくりと耳を傾けながら、多様な側面からテーマについてより深く考えることができた。

4. 今後に向けて

話し合い後の振り返りの場面では、自分の考えの変化を自分自身で確認できるように、カメラ機能やスクリーンショット機能を活用した。そうすることによって、児童自身が考えの深まりを意識して自己と対話しながら自分の生活を振り返ることができた。NHK の番組を含め、iPad の活用は、道徳性を養い、実践力を育む道徳科の学習に、大変有効であったと考える。

1. 本実践に関わって

本実践を行う意義は、次の点で重要であると考ええる。

○単級で5年間過ごしてきたクラスで男女関係なく過ごしている学級であると担任が述べているように、その中でお互いの気持ち、考えを共有出来ているように見える。しかし、学習や生活の中で、「自分の意見、考えを言える子」「なかなかいえない子」、また、一人ひとりの良さを知ろうとしているかを考えるとまだまだ少ないと感じているからである。

○現在の子どもたちの関係から、仲が良いとはいえ、言葉の中に気になることはないかを考えさせることが重要であると、【いじめをノックアウトー「あいつ、変じゃね」って変じゃね?～悪口をなくすヒント～】を視聴し、さらに、ワークシートの自作から、タブレットを利用し、クラス全体での共有することで、お互いの考えが分かり、さらに、考えを交流が出来ることで、より良い関係を深められる。

○子どもたちが、自分の意見と友だちの意見を交流することが道徳的価値を高めることにつながり、実践力につながると考えている。

本実践によって、「NHK for school」「Metamoji Classroom」の活用により、担任が子どもたちの今後をより良くしていこうとする思いが実践を通して、つながっていくと思われる。

2. 今後に向けて

文部科学省は、道徳の指導におけるICTの活用について、下記のように、

○「自分ならどうするか」という観点から道徳的価値と向き合うとともに、自分とは異なる意見を持つ他者と議論することを通して、「多面的・多角的に考える」場で、自分の立場の考えの選択、他者の考えを知る、全体の考えの共有に活用することで考えを深める学習を行う。

○他者との合意形成や具体的な解決策を得ること自体が目的ではなく、多面的・多角的な思考を通じて、道徳価値の理解を「自分自身との関わりの中で深める」場で、自己を見つめ、整理し、端末に考えを表記、それぞれの考えを把握・整理し、全体に共有する。

など、効果的な活用を挙げている。ただし、ICT活用について、目的と手段を間違えないように留意を促している。

“GIGAスクール構想”を受けて、大津市では、現在4年生以上の児童にひとり1台ずつタブレットが貸与されている。機器の利用、活用の中での問題点は多くあるが、子どもたちの生きる力の育成につながると期待している。そのためには、下記の点に留意が必要かもしれない。

○ICT機器の整備における地域間格差

○指導者の活用の温度差

○オンラインにおけるセキュリティー対策、情報モラルの取組

○各家庭での利用

など、いろいろあるように思われる。

その中で、まず本実践のように、現場で指導者が使っていくこと、研究を深めることが重要ではないかと考える。そのことが、子どもたちにとって、一人ひとりの深い学びにつなげていくことができるはずである。

指導者が、授業内容を考え、その中で、いかにICT機器等の活用もしながら、積み重ねることで少しずつ成果につながり、また、課題が見え、また…というように繰り返すことが、子どもの成長になっていくように思う。

中学校部会

研究主題

一人一台タブレットの活用における 主体的・対話的で深い学びの実現を目指して

研究概要

①公開授業（米原市立米原中学校）

（新型コロナウイルス感染拡大防止の為、参集型の研修会は行いません。指導案をご覧ください。）

学年	指導者	教科	単元名	利用番組・メディア
2年 B 組	中村 俊仁	特別活動	「ジェンダーについて考える」	・NHK for School 「いじめをノックアウト」
2年 B 組	金谷 裕子	国語科	古典「扇の的」 平家物語	・NHK for School「平家物語」 ・ミライシード「オクリンク」

②研究実践交流会（ホームページのアーカイブ上で動画公開）

部会	提案主題	提案者	助言者
中学校	基本的人権の尊重 ～これからの人権を考える～	大阪市立昭和中学校 古市 典子	大阪市教育委員会 黒木 宏一郎
	自ら課題を発見し、「主体的に学習に向かう 態度」の育成を目指して	米原市立米原中学校 澤頭 崇	

特別活動指導案

令和3年11月26日(金曜日)第5時限
教室 2年B組 男子13人 女子15人
指導者 中村俊仁

1 主 題 性の多様性について考えよう

2 資 料 名

“女らしさ 男らしさ”がいじめにつながる〈出典 NHK for school いじめをノックアウト〉

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

「男らしさ」「女らしさ」という固定観念で人を見ることが往々にしてある。しかし、自分たちの周りにも体の性と心の性の違和感等から人知れず苦しんでいる生徒がいるかもしれないという意識を持つことが必要である。統計的には、LGBTQ+ (Lesbian、Gay、Bisexual、Transgender、Questioning) と総称される性的少数派の日本人が、3～10%いるといわれている社会では見過ごせない問題である。このような状況の中、社会的・文化的性差(ジェンダー)を正しく理解し、一人ひとりが「ありのままの自分」を表現し、自分らしい生き方を模索できるようにすることが大切である。

(2) 生徒の実態について

中学生の時期は、学年が上がるにつれて、「自分とは何か」、「他者との違いは何か」などについて考え始め、心が揺れ動く時期である。中には自らの体の性と心の性の間で揺れ動いている生徒がいるかもしれない。自分の感情を大切にしながらも、相手のことを考え、尊重する態度が求められるようになる時期である。本学級の生徒は、活発に意見が言える反面、考えなしに言葉を発する場面が見られるため、相手の立場に立った行動や態度を育んでいきたい。

(3) 教材について

本教材は、性的マイノリティであった一青年の声をもとに、苦悩した気持ちに、触れながら、「男らしさ・女らしさ」「人との違いとは何か」、「自分らしい姿(生き方)とは何か」などを考えられる映像教材である。

本授業では、「男らしさ」「女らしさ」とは何かの、核心に触れるとともに、「性の多様性」について自ら考えるとともに、性的マイノリティに対する配慮として「制服」についても考えさせる。これらのことは、生徒に自分らしい生き方について考えさせるきっかけになるとともに、互いのよさを認め合うことの大切さを実感させることにもなると考える。

4 ね ら い

- 性の多様性を理解するとともに、違いを認め合い、自分らしく生きようとする態度を育てる。

5 準 備 (教) ワークシート

6 指導過程

時間	学 習 活 動	生徒の反応	指 導 上 の 留 意 点
5 (5)	1 NHK for school いじめをノックアウトの初めの10秒を見て、どう思うかを発表する。	・違和感がある。 ・見た目で決めてしまっている自分がいる。	○ 女子の王子様、男子のお姫様について、率直な意見を出させ、その時の認識を共有し、関心を高める。
15 (20)	2 NHK for school いじめをノックアウトの初めの11秒から2分までを見て、ジェンダーについて考える。		
問い：学校生活に「男らしさ」「女らしさ」は必要だろうか。 必要ならメリットは何か。不必要ならデメリットは何か考えてみよう			
		・肉体的な性差はあるから必要。 ・部分的には必要。 ・人それぞれ物差しが違うから不要。	○ 出来れば「男らしさ」「女らしさ」、「その他の○○らしさ」も付け加える。 ・中学生らしさ（若者らしさ） ・大人らしさ など
5 (25)	3 NHK for school いじめをノックアウトの残りを見て、学校で男女の違いがあるものにはどんなものがあるのかを考える。	・部活動の違い。 ・トイレの違い。 ・制服の違い。 ・更衣室の違い。	○ 身近な学校生活の中で、目に見えて違いがあるものに焦点をあてる。
20 (45)	4 3で出す意見「制服」について考える。		
問い：男女で制服の違いは必要か。その理由は何か。			
		・体操服に違いはないので必要ない。 ・男子・女子で見た目に求められているものが違うので必要な部分もある。 ・社会にでても服装の違いがあるので、必要である。 ・固定観念を打破するために無くすべきである。	○ 初めに自分の意見をもたせるために2分間、個人で考えさせる ○ 個人で考えた後、4人班になり個人で考えた意見を持ち寄り、班として集約する。 ○ 最後に各班に発表させ、意見の交流をする。
5 (50)	5 ジェンダーを正しく理解し、自分らしく生きようという意識を高める。		○ 互いの良さを認め、自分らしく生きるためにできることを記入させる。

国語科 学習指導案

日時：令和3年11月25日(木)5校時

学級：第2学年B組

授業者：教諭 金谷裕子

1. 単元名

「扇の的」を読んで、登場人物の言動の意味を考え、伝え合おう。

(教材名：「扇の的」—平家物語より)

2. めざす生徒の姿

「字のない葉書」の学習では、家族の思いが表れている文章を探し、その表現の特徴や、文字で表されていない行間から家族の思いの読み取りを行った。表現の仕方に意味を考え、隠された思いに気付く生徒もいたが、言葉のまま受け取り、深く読み進められない生徒も少なくない。しかし、それぞれの考えを交流することで、考えが深まっていた。また、ふりかえりの中で、自分にはない視点・切り口の考え方に気付いたことを記述し、今後の学習に取り入れていきたいと意欲をみせる様子が見られた。

そこで本単元では、[思考力・判断力・表現力等]の「読むこと」の指導事項にあたる、「イ：登場人物の言動の意味などについて考えて、内容を解釈する」力を身につけることに重点を置く。

3. 単元観

本教材は、「平家物語」の多彩な人物群の中から、うら若い青年でありながら、屋島の戦いの命運を託された「那須与一」が取り上げられている。対比や繰り返し、七五調に近い韻律、擬音語などが多用され、通常の散文とは異なるリズムを持っている。まずは、朗読を通してリズムを感じ取りながら歴史的仮名遣いに触れていきたい。また、「諸行無常」という仏教思想を背景に、軍記物語ならではの歴史書にはない個々の人間のありさまが描かれており、合戦という緊迫した状況に追い詰められた当時の武士の生き方や心情について理解を深めることができる作品である。そこで、物語を読み進めていく中で出てくる疑問に対して、根拠(理由)を示しながら、自分なりに解釈を行うことを目標とする。

4. ICT 活用の視点

本単元では、「ミライシード」の「オクリンク」を使って、発表や意見交流を行う。自分の考えをカードにまとめる。その際、聞き手への理解を促す補助資料となるように、キーワードを書いたり、矢印などの記号を活用したカードの作成を行うなどの工夫をする。また、聞き手は発表を聞きながら自分の考えと比較し、発表者へ質問を行う。その際に、カードに質問を書いて発表者に送る。最終的に発表者は発表時に用いたカードと質問が書かれたカードを教師に提出する。このように「オクリンク」を使うことで文書による交流かつ効果的に行える。また、教師は、生徒が書いた物が手元に残ることもあり、全体への共有がしやすく、助言しやすくなるとともに、評価にも活用できる。

5. 単元の目標

(1)現代語訳や語注などを手がかりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知らることができる。
〔知識・技能〕(3)イ

(2)登場人物の言動の意味などについて考えて、内容を解釈することができる。

〔思考力・判断力・表現力等〕C 読むこと(1)イ

(3)場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写をもとに捉えることができる。

〔思考力・判断力・表現力等〕I 年 C 読むこと(1)イ

(4)粘り強く登場人物の言動の意味を考え、学習課題に沿って考えたことを説明しようとする。

〔主体的に学習に取り組む態度〕

6. 本単元における言語活動

「扇の的」を読み、理解したことや考えたことを説明する活動。

〔思考力・判断力・表現力等〕C 読むこと(2)イ

7. 単元の評価基準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
①現代語訳や語注などを手がかりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知っている。(3)イ	①「読むこと」において、登場人物の言動の意味などについて考えて、内容を解釈している。C(1)イ ②「読むこと」において、場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写をもとに捉えている。I 年 C(1)イ	①積極的に登場人物の言動の意味を考え、学習課題に沿って考えたことを説明しようとしている。

8. 指導の計画と評価

	学習内容	◆学習のねらい・学習活動	評価する内容・方法
第一次：内容を確認する。			
第1時 第2時 第3時	・冒頭文の内容を確認する。 ・「扇の的」の内容を学習する。	◆「平家物語」の概要、「扇の的」の内容をおさえる。 ・NHK for school の動画を用いて、「平家物語」の概要を知る。 ・本文を読んで、「扇の的」の内容を確認する。	〔知識・技能〕① 観察・ワークシート
第二次：課題を見つける。			

第4時	・「扇の的」を読んで、疑問点を書き出す。	◆課題を見つける。 ・本文を読んで、知りたいこと・課題になりそうなことを書き出す。	[知識・技能]① 観察・ワークシート
第三次：課題を探求する。(ジグソー学習)			
第5時 第6時 第7時	・ホームグループにて考える 課題を決める ・課題について、自分の考えをまとめる。 ・エキスパート集団に分かれ、考えを交流する ・話す内容を整理する。 ・交流(発表)の準備や練習をする。	◆登場人物の言動の意味を考える。 ・それぞれの課題について、グループや個人で考える。 ・ミライシードのオクリンクを用いて、発表の準備をする。	[思考力・判断力・表現力等]①② [主体的]① 観察・ワークシート
第四次：交流、内容の再検討			
第8時 (本時) 第9時	・ホームグループで考えを交流する。 発表内容を再検討する。	◆自分の考えを伝えと同時に、人の意見を聞いて、考えを深める。 ・オクリンクを使ってグループで自分の考えを発表する。 ・自分の考えとの相違点を見つけ、発表者に質問をする。 ・質問を整理して、内容を再検討する。	[思考力・判断力・表現力等]①② [主体的]① 観察・オクリンク
第五次：全体発表			
第十時	・再検討した内容を全体に発表する。	◆自分の考えを伝えと同時に、人の意見を聞いて、考えを深める。 ・相違点、共通点を中心に捉え、感想を書く。	[主体的] 観察・オクリンク

9. 本時の目標

登場人物の言動の意味などについて考えたことを説明し、自分の考えをさらに深めることができる。

10. 本時の展開

	学習内容・活動	評価
導入	1. 漢字テスト 2. 本時の学習のねらいを確認する。 本文を読んで、みんなが着目した文や表現を共有する。	

めあて:考えたことを交流し、グループから出た質問から発表内容を再検討しよう。		
	①平家はなぜ扇の的を出してきたのか。 ②源義経は、なぜ扇の的を射させたのか。 ③どうして与一は切腹するくらいの気持ちだったのか。 ④扇を射るとき、どうしてかぶら矢を使ったのか。 ⑤なぜ、五十歳ぐらいの男は舞を舞ったのか。 ⑥なぜ、源義経は舞っている男を殺させたのか。 ⑦「あ、射たり」・「情けなし」と言う人がいたが、違いはなにか。 3. 交流の手順を確認する。	
展開	4. オクリンクを用いて交流 ・発表者:自分の考えたことを、オクリンクのスライドショー機能を用いて発表する。 ・聞き手:自分の考えと聞き比べ、相違点を中心に感想と質問を、オクリンクのカードに記入する。 ・聞き手:書いたカードを発表者に送る。 5. 再検討 ・送られてきたカードを基に、自分の考えを再検討する。 ○自分の考えに理由や根拠を示すようになる。 ○自分とは違う考えを受け入れ、発表内容に反映させる。	[思考力・判断力・表現力等] ①② [主体的]① ☆観察・オクリンク
終末	6. カードの提出 ・発表に用いたカードと、質問のカードをまとめ、提出ボックスに提出する。 7. 振り返りシートを書く。 8. 次回は本時の続きをすることを伝える。	

11. 準備物

①ワークシート ②タブレット ③電子黒板

基本的人権の尊重 ～これからの人権を考える～

ダイジェスト(概要)

昭和中学校ではこれまで ICT 活用においてすべての教科・領域において学習者用端末を使った授業を行っており、生徒のスキルは必要十分なレベルに達している。3年生公民の本単元でプライバシーの権利を学習するにあたり、学習者用端末を使って情報活用能力を十分発揮させるとともに、協働的な学びを深めていく実践を紹介する。

〔キーワード〕 情報活用能力の発揮 協働学習

1. 実践のねらい

社会の変化にともなって新しい人権が主張されるようになってきているなか、とりわけプライバシーの権利は情報化社会の進展と切っても切れない関係にある。生徒たちも日常的に SNS を利用している現状を踏まえ、情報化社会の利便性と闇の部分に考えを深める機会にしたい。具体的には Google ストリートビューや防犯カメラという身近なものを例にあげて協働学習を取り入れながらプライバシーの権利について学習していく。

2. 実践の方法・流れ

【導入】

個人情報に関するアンケートを行い、プライバシーの権利についての意識づけとする。

【展開①】

- ・Google ストリートビューのサイトをひらいて自分や友人の家を探し、どの程度個人情報が守られているかを確認する。各自で気づいたことは「コラボノート EX」に書き込み、全員で共有していく。
- ・Google プライバシーポリシーのサイトを利用して言葉の意味や個人情報保護法について学習する。

【展開②】

- ・防犯カメラの設置について班で話し合いをする。出た意見を「コラボノート EX」にいったん書きだし、集約したものを代表者が発表する。
- ・これまで出た意見を踏まえた上で、防犯カメラ設置に関する個人アンケートを Microsoft Forms で行い、その場で共有する。

【まとめ】

本時の授業は第1部第1章第1節の「情報化が進む現代」で扱った内容と密接に関わっているので、復習の意味も込め、改めて情報化社会のさまざまな側面について言及する。また「基本的人権の尊重」を扱う最後の時間なので、今一度人権について考えを深めるように促す。

3. 実践の結果・考察

ねらいどおり生徒たちが学習者用端末を駆使して情報活用能力を十分発揮する授業ができた。「コラボノート EX」を使った個別学習では他の生徒の意見をリアルタイムで確認できるので各自が作業しながら新しい気づきにつながった。同じく協働学習では班のメンバーで意見を出し合い、協力しながら意見を整理・集約することでより深い学びができた。また、個々の意見に関するアンケートは Microsoft Forms を使うことで集約を迅速にし、授業のまとめを効率的に行うことができた。総合的に、今回の授業では普段よく使うサイトを利用したことでプライバシーの権利についてより身近に感じ、学ぶことができた。生徒には自分事として考えを深める機会になったと思う。

4. 今後に向けて

今後の授業でも学習者用端末を使用して授業展開していくことが多いが、特に調べ学習などではインターネットから正しい情報を得る方法についてしっかり指導していく必要がある。情報リテラシーの育成についてはこれからも継続して指導していきたい。

指導助言の場を借りて、まずは大阪市のこれまでの ICT 活用の取組についてご説明します。

平成24年度に学校教育ICT活用事業を立ち上げ、ICTモデル校8校を選定し、25 年度から3年間、タブレット端末等のICT機器の授業での活用を行い、27 年度にその成果を「大阪市スタンダードモデル」としてまとめました。

モデル校での成果を受けて、27 年度末に、全小中学校に基本40台のタブレット端末等のICT機器を整備するとともに、全教室において40台のタブレット端末が同時通信できるよう校内LANを整備しました。モデル校については、各区(24 区)1 校以上となるよう8 校から29 校に拡充し、小学校3年生以上の各学年に40台のタブレット端末等のICT機器を整備し、公開授業や教員研修の拠点等ICT活用の中核的な役割を担いました。30 年度には、モデル校を中心にICTを活用した授業づくりの効果検証を行い、2年間の結果を「平成 29 年度報告」として取りまとめました。

令和元年度からは、2年間、モデル校を ICT 活用拠点校に改め、引き続き ICT を活用した授業公開や教員研修等の拠点として取り組みを行いました。

2 年度末にGIGAスクール構想において、1 人 1 台の学習者用端末を整備するとともに、全ての教室にアクセスポイントを整備し、3年度から、これまでの成果や課題をふまえ、児童生徒の 1 人 1 台学習者用端末の日常的な活用に加え、非常時での活用(オンライン学習)等、様々な学習場面での活用を行うとともに、著作権や肖像権、情報を正しく安全に利用できる等の情報モラル教育を進めており、これからの情報社会を生き抜く子どもたちの育成をめざし、取り組みを進めています。

発表されました大阪市立昭和中学校におかれましては、平成 19 年度にユビキタスネットワークスクール新モデル事業を始め、25 年度からは ICT モデル校として、令和元年度から2 年度は ICT 活用拠点校として、大阪市の ICT 活用をけん引する中心的な役割を担っていただきました。

また、大阪市のみならず、日本教育工学協会(JAET)が取り組んでいる学校情報化認定において、平成 29 年度は「情報教育」、令和2年度は「教科指導における ICT 活用」の2つのカテゴリーで学校情報化先進校に認定されており、去る 11 月 19・20 日に開催されました第 47 回全日本教育工学研究協議会全国大会において、これまでの取組等について研究発表をされました。

今回の発表では、中学校社会科において「基本的人権の尊重～これからの人権を考える～」の学習における 1 人 1 台の学習者用端末を活用した実践事例を紹介いただきました。

本実践の中では、前授業の終わりにMicrosoft Formsを活用してインターネットで公開してもよいと思う個人情報についてのアンケート結果の共有を行い、Googleストリートビューでの個人情報の取り扱いについて調べることで、インターネット上での個人情報の取り扱いについて興味関心を持ち、必要な情報の主体的な収集が実施されました。

その後、調べた結果をコラボノートEXの協働学習機能を活用して自分の意見をまとめて、発表し、友だちの意見を共有することで対話的な学びが実施され、生徒は学びを深めることができました。

ICTを活用することで、早く効果的に情報収集ができ、友だち同士で情報交換がやりやすく、考えを広めたり深めたりする内容となり、生徒の主体的・対話的で深い学びを実現する実践となりました。

学習指導要領において、情報活用能力(情報モラルを含む)は学習の基盤となる資質能力の一つとして位置付けられています。また、携帯電話・スマートフォン等の通信機器が子どもたちにも急速に普及し低年齢化も進んできています。今回の社会科の中で情報モラルの視点を取り入れた実践を発表いただきました。今後、情報モラル教育を各教科等の教育課程に位置付け取り組みを進めていく必要があります。

改めまして、昭和中学校におかれましては、貴重な発表を提供いただきましたことについてお礼申し上げますとともに、ご参会の皆様には、研究の成果をお持ち帰りいただき、これからの研究・実践にお役立ていただきますようお願いいたします。

自ら課題を発見し、「主体的に学習に向かう態度」の育成をめざして

～ICTを活用した効果的な授業作りをめざして～

ダイジェスト(概要)

タブレットを活用した、授業作りと改善を通して、学ぶ姿勢の態度を育成する米原中学校の取り組み。

[キーワード] ICT GIGA スクール構想 タブレット 授業改善

1. 実践のねらい

これまでの一斉型の授業では子供たちの理解力に差があっても、1人1人に最適化した教材や指導を取れないことが課題だった。

GIGA スクール構想での、1人1台端末と高速通信環境整備をベースとして、Society 5.0 の時代を生きる子供たちのために「個別最適化され、創造性を育む教育」を実現させる施策は、互いの考えをリアルタイムで共有でき、教員と生徒の双方向での意見交換も活発になり、1人1人のニーズに応じた主体的・対話的で深い学びの授業作りにつながるものと考える。

を集めることができる」、「学習のめあてに合った画像や表、文章などを組み合わせてまとめることができる」、「友だちと話し合うとき、友だちの話や意見をお互いに最後まで聞くことができる」と答えている。

指導者においても、情報活用能力をこれからの時代を生きぬく力と共通認識し、必要な情報を収集する能力・収集した情報を取捨選択しまとめる能力・まとめたものを人に伝える能力の3つを教科横断的な取り組みを通して育成する必要性を感じた。

4. 今後に向けて

今後は自宅学習での有効な利活用を進め、それを支える指導者のスキルを向上させたい。また常に授業改善の意識を持ち、端末や通信環境などのハードを活用した授業の研究を進めることで、より質の高い教育の実現を目指す。さらに教員の働き方改革にもつなげていきたい。従来の教育現場では、多くの業務が効率化されておらず、教員の勤務時間は長くなる傾向にあったが、GIGA スクール構想を通してこれらの解決につなげていきたい。

2. 実践の方法・流れ

(1)教科指導における効果的な活用方法と教科以外での活用方法について実践を行う。

(2)校務運営や働き方改革につながる活用方法や実践を行う。

(3)校内研究会で各自の実践の交流を行い、課題や解決策について協議を行う。

(4)講師を招き、具体的な機器操作から先進的な実践紹介、また学校での学びがこれからの社会にどうつながるのか等の講義・演習を行う。

3. 実践の結果・考察

滋賀県総合教育センターと共同で実施した、1人1台端末を活用した授業づくりに係る生徒および指導者の意識調査によると、7割以上の生徒が「学習のめあてに合った写真や動画

校内研究・研修の計画	
月	校 内 研 究 計 画 ・ 内 容
4	17日(水) 推進委員会：研究計画・部会の実践計画構想
5	24日(月) 職員会議：本年度の研究主題および内容・組織の提案
	31日(月) 推進委員会・職員研修
6	21日(月) 職員研修(講師：滋賀大学教育学部教授 森野公人)
	22日(火) 授業研究の検討 ①3B技術公開授業
7	30日(金) 職員研修(講師：米原市ICT支援員)
	6日(金) 職員研修(講師：米原市ICT支援員)
8	19日(木) 職員研修(講師：滋賀大学教育学部教授 森野公人) ICTの効果的な活用と課題について
10	4日(月) 職員会議 研究授業に向けて
	8日(月) 学ぶ力向上学校訪問 職員研修 公開授業に向けて
11	模擬授業(国語科) 指導案検討会(特別活動)
	25日(木) 近畿放送・視聴覚教育研究大会
1	推進委員会
2	第2回研究授業・研究協議
3	研究のまとめ

高等学校部会

研究主題

豊かな自己実現のために、情報化社会の変化に対応しながら、メディアの持つ有効性を確かめ合おう

研究概要

①公開授業（滋賀県立河瀬高等学校）

（新型コロナウイルス感染拡大防止の為、参集型の研修会は行いません。指導案をご覧ください。）

学年	指導者	教科	単元名	利用番組・メディア
※本冊子に高等学校部会の指導案は掲載されていません。お知りおきください。				

②研究実践交流会（ホームページのアーカイブ上で動画公開）

部会	提案主題	提案者	助言者
高等学校	ニュース放送を授業に取り入れる試み ～現代社会・公共～	大阪府立池田高等学校 久下 哲也	滋賀県教育委員会 柳垣 弘樹
	Google Classroom 及び BYOD による 対話的で主体的な学びの実践	滋賀県立米原高等学校 濱川 綾	

ニュース放送を授業に取り入れる試み

～現代社会・公共と情報リテラシー～

今年、コロナ禍と東京五輪、さらにはGIGAスクール導入という波乱の年であり、現行教育課程最後の高校1年生でもある。その1年現代社会を担当するにあたり、次年度からの観点別評価本格導入も視野に入れて、「ニュースを授業に取り入れる」という実践を試みている。

[キーワード] 現代社会、公共、情報リテラシー、ニュース、フェイクニュース

1. 実践のねらい

私は30年以上にわたり、NHK杯全国高校放送コンテストへの参加も含めて、放送部の指導にあたってきた。コンテストにはアナウンス部門や番組制作部門がある。そこでの指導経験を現代社会の授業に活かせたらと考え、今年度の授業の通年テーマを「情報リテラシー」に置くこととした。

情報リテラシー教育の必要性については、現行教育課程・新課程ともに言及されている。また冒頭に述べた昨今の社会状況下、特に重要なスキルだと考えたからである。また、生徒個人に配布されるPC端末の活用にもつながることが期待された。

■2学期「ニュースの表現について考える」

情報リテラシー教育への視点として、ニュース報道の表現を考えさせようと考えた。

ここでは、フェイクニュースを取り上げた。具体的には、「ウソのような本当のニュース」を探すことと、「フェイクニュースを自作すること」を夏休みの課題とした。提出させたものを組み合わせてクイズ形式で提示し、ニュース表現の危うさについて体験し考えさせた（課題提出とクイズ提示は、ネットの活用で作業を効率化した）。

また、東京五輪の開催とコロナ感染拡大をめぐる世論の変化を素材に、同じデータでも表現の仕方で違う印象を与えられることも体感させた。

2. 実践の方法・流れ

コロナ感染防止のためグループ討議等の自粛、また生徒個人へのPC端末配布が2学期という予定を踏まえ、凡そ以下のような通年計画で進めてきた。

■1学期「ニュースを体験する」

毎時間の授業の冒頭に2人ずつ（順序は事前に抽選）実際に報道されたニュースを読み、それを選んだ理由や感想を述べる。ニュースは、NHKホームページの「各地のニュース」から自由に選ばせた（ただし、事前に私に送信させ、内容や他の生徒との重複など最低限のチェック）。コロナ対応のため生徒は自席でニュースを読み、小型スピーカー付き無線マイクを購入して音量を確保した。

3単位の授業だが、クラス40人が1巡するのに1学期を要した。

3. 実践の結果・考察

生徒の感想は概ね好評であるが、「体験」の域を出ていない意見が多い。授業者としても手探りの面があり、授業の全体像を十分に示せていないことが一因である。3学期に向けて再構築したい。

4. 今後に向けて

9月、ようやく配布されたPC端末を使って、生徒自身に取材・撮影から録画・編集などのニュース制作を体験させようとして計画している。GoogleClassroom を使って限定「放送」も行い、評価し合うところまで進めたいと考えている。

Google classroom および BYOD による対話的で主体的な学びの実践

ICT でしかできないことを効果的に取り入れる授業の研究

ダイジェスト(概要) Google Classroom を介して、生徒同士の学びを繋ぎ、生徒の自宅学習を主体的なものにする
ことにより、授業における言語活動の充実を図る取り組み。

[キーワード] Google Workspace for Education, 共同編集、ディスカッション、グループワーク、言語活動

1. 実践のねらい

- ・授業の進度や学習内容の量を落とさずに、英語のアウトプット活動の時間を増やす。
- ・授業内外における生徒同士の学び合いを活性化する。
- ・40人程度のクラスサイズでも、個々の生徒の学びを見取り、適切な支援や指導を行う。
- ・授業と自宅学習の効果的な連動を図る。
- ・言語活動と創造的活動を一体化させる。

2. 実践の方法・流れ

- 1 生徒の端末に Google Classroom のインストールと活用の説明を行う。また Google の様々なアプリケーションのインストールと活用の説明を行った。活用については、Quizlet, Forms など取り組みやすいものの活用から始めた。
- 2 自宅学習で準備したものを活用して、授業内で言語活動を行った。希望者には放課後に学校の端末を使用することを許可した。特に、Spreadsheet, Document, Slide, Jamboard などのアプリケーションで生徒に共同編集させたものを授業で活用して言語活動を行った。

◎ 授業での実践例

- ① Slide を1～3枚用いて、テーマ “What I’m absorbed in”について1分間スピーチをする。原稿も作成して暗記して発表した。発表はペアで相互に端末を使用して録画し、自己評価と発表の改善を行う。後に指導者が評価した。
- ② 科学技術が題材の英文を読んだ後、ディスカッションのテーマを Forms で募集・決定した。・Do humans need clone pets? ・Do you want to have AI Teachers? ・How will AI Change our lives? など、生徒の意向を反映させたテーマでディスカッションを行った。その際、Spreadsheet に各グ

ループの議論を逐次記録させ、全てのグループの議論をモニターし、必要なグループに適切なタイミングで支援や指導を行った。また、Spreadsheet に記録されたグループごとの議論を、ホワイトボードに投影し、振り返りやフィードバックを行った。

- ③ 芸術についての英文を読んだ後の活動として、「13歳からのアート思考」(末永幸歩著)をジグソー法形式で生徒に読ませ、Jamboard を使用したワークショップを実施させた。Jamboard を Classroom 上で共有して使用することにより、生徒同士がお互いの進捗状況を自宅でも確認しながら準備を進めた。

3. 実践の結果・考察

- ・実践例①では、生徒一人一人が個性的なスライドを作成していた。個人の端末に保存している画像や動画も取り入れたりして、より良いものを作ろうと主体的に取り組んでいた。また、英語の苦手な生徒も発表の練習に積極的に取り組み、満足度の高い発表ができた。
- ・実践例②では、Spreadsheet をディスカッションのモニターとして活用したことが、最も効果を発揮した。10グループのディスカッションを同時に見取することは、通常では不可能であるが、ICTによりある程度可能になった。また、生徒の記録した英語の表現を使って、言語面でのフィードバックも丁寧に行うことができた。
- ・実践例③では、Jamboard が生徒の自宅学習を繋ぐ役割を果たした。同じ内容でワークショップをする生徒同士が協力し合いつつ、個々に独自性も保ちながら準備ができていたようである。

4. 今後に向けて

ICT を活用して生徒の創造性を生かした言語活動を続けながら、今後は言語習得により直接的に作用する ICT の活用を研究していきたいと考えている。

◇指導助言

滋賀県教育委員会事務局 高校教育課 主査 柳垣 弘樹

前任校での取組としての発表でした。実践①では『惹かれるプレゼン!』を目標として、生徒たちの身近な話題をテーマにしたプレゼンテーションを、実践②指導者がファシリテーターとなつての英語でのディスカッションを、実践③ワークショップ(ジグソー法)による学び合いを発表していただきました。その中では、「Jamboard」というアプリを活用して、「Learning Reflection」に重きを置かれていました。生徒たちの様子からは手ぶりを使って表現を広げようとする熱いシーンもうかがえました。一つ気になる点としては、タブレットの画面が小さいという点。もう少し大きなモニターで繋ぐなどすればもっと盛り上がったのではないのでしょうか。授業時や自宅学習での即時添削はICTにしかできない特性を十分に生かした実践例として他の学校でも参考となるこれがスタンダードになっていくと思います。

異動後の学校での現在の取組では、SDGs を軸に『つながる、つなげる授業』をキーワードとして取り組んでおられるとのことでした。「TDE」や「Flipgrid」などのアプリを使って授業実践が少しでも拝見できればよかったと感じております。

発表テーマとしては、『Google Classroom 及び BYOD による対話的で主体的な学びの実践』とありましたが、新学習指導要領の『主体的・対話的で深い学び』を意識したものと思います。主体的な学びや対話的な学びの両方を通じて深い学びにつなげることがゴールとなっていますので、今後は、どのようにして「深い学び」へとつながるのかという視点で授業改善をしていただければと存じます。

最後のまとめとして、ICTにより視野・授業・人脈が広がったこと、教育・学びの再定義できたことについては私自身も同様に感じております。ICTにより培った人脈が、今後の授業に幅を持たせ、より授業に深みをもたらすのではないのでしょうか。今後も「楽しんで」という視点を大切にして新たな ICT 活用実践を進めていただければと存じます。

特別支援学校・学級部会

研究主題

生き生きと学び合う子どもの姿を求めて

研究概要

①公開授業（米原市立米原小学校）

（新型コロナウイルス感染拡大防止の為、参集型の研修会は行いません。指導案をご覧ください。）

学年	指導者	教科	単元名	利用番組・メディア
なかよし3 4 5	岡田 牧 清水 浩美 岩崎 美紀	自立活動	交流学級の みんなに自分の ことを伝えよう	ミライシード「オクリンク」

②研究実践交流会（ホームページのアーカイブ上で動画公開）

部会	提案主題	提案者	助言者
特別支援 学校・学級	アイツだけ、ずるい！ ～公平ってなんだろう～	和歌山市立宮前小学校 森本 亜輝子	
	PowerPoint を活用した学習発表会	長浜市立長浜北小学校 角田 敦	長浜市立木之本小学校 岸 明宏

アイツだけ、ずるい!

～公平ってなんだろう?～

一人一人の障害の特性によって、それぞれ異なる配慮が必要な特別支援学級の子供たち。しかし、お互いに「あの子だけ、ずるい!」と思う気持ちも持っている。本当にずるいのか、公平とは何なのかについて考えさせるために、NHK for School「u&i」の動画を使って授業を行った。

[キーワード] 特別支援教育 公平 道徳 自立活動

1. 実践のねらい

誰に対しても公平な態度で接することができる。

2. 実践の方法・流れ

時間	学習活動	指導上の留意点
10	○今まで、友達をみて、ずるいと思ったことやひいきだと思ったことはないか振り返る。 ○絵を見て、思ったことを発表する。 ・机の上に砂時計を置いている女の子 ・教室の外に机を置いて授業を受けている子 ⇒発問「これってずるい?」 ○もう一つの絵をみて、思ったことを発表する。 ・砂時計がなくて、心が落ち着かない。 ・みんなの中に入るのは怖いから、外から授業を聞いている。 めあて 公平について考えよう。	◎心の中で振り返るだけでいいと声をかける。 ◎絵は、子供たちの中でありそうな場面を描いて提示する。
15	○「アイツだけ、ずるい!」を視聴する。	◎考えてほしいタイミングで動画を止める。
10	○授業の感想を発表する。 ⇒発問「ユウくんがタブレットを使うことはどう思う?」	
10	○野球会場の絵を見て、意見を出す。 まとめ 公平＝みんなと同じようにできること (スタートラインが一緒になること)	
準備物	パソコン、「これってずるい?」イラスト2組、野球場のイラスト1枚	

3. 実践の結果・考察

絵や動画を使うことで、自分だったらどう思うかということを考えやすかったようで、クラスの児童は真剣に授業に取り組むことができた。

「ユウくんがタブレットを使うことは、ずるいように見えるし、ぼくも使ってみたいけれど、理由があるならずるくないと思う。」「せこいなあと思うことも、その人にとっただけなら困ることだから、せこくない。」「野球場の絵を見て思ったけれど、身長とかその人にとっただけならどうしようもないことで、野球場を観れないのはおかしい。同じ数ずつ台を渡すのではなくて、その人に合わせて台の数を变えるのが公平なんじゃないかな。」という意見がたくさん出た。特に、「人にはそれぞれ理由があって、私も同じように人の中に入れない理由がある。」ということ話をしてくれた児童の意見に、みんな「そうだよな。」とうなずいたのが印象的だった。公平というのは、人それぞれの理由でやり方は違っても、みんなが同じようにできるようにすることで、これからみんながお互いに認め合って生活していきましょうということで授業を終えた。その後、「せこい!」というような言葉は生活の中で出なくなった。また、困っている子やケンカをする子がいれば「どうして困っているの?」「何か理由があるの?」と考えられるようになったのも、この授業がきっかけだと思う。

4. 今後に向けて

今後も定期的に、NHK For School の動画を使って、子供たちが教材に対して、興味関心を持って楽しく学習に取り組める環境を作っていきたいと思う。また、自分の思いや考えをしっかりと伝えることができるように、特別支援学級でも道徳的な自立活動の授業をこれからも行いたい。

PowerPoint を活用した学習発表会

児童が安心して取り組める演劇発表会

特別支援学級には、発表する場所の変更に対応しにくく、普段どおりの演技ができない児童も在籍している。プレゼンテーションソフトを使用して、背景や BGM、効果音などを練習のときから同じタイミングで出せるようにし、演じる場所が変わっても児童が安心して演技ができるようにした。

【キーワード】 特別支援学級、学習発表会、プレゼンテーションソフト、PowerPoint

1. 実践のねらい

長浜市の特別支援学級の合同学習発表会は、例年文化ホールの大ステージで行われる。本校はまず、マルチスペース（多目的室）で練習して保護者に発表し、体育館のステージで練習して全校児童に見てもらう。そして、2回の大ステージでの練習の後、文化ホールの大ステージで発表会を迎える。児童が緊張しないように少しずつ会場を大きくして練習していくのだが、場所が変わる度に、変更に対応できず、混乱する児童がいる。場所が変わると背景や大道具、音響などが変わり、それに伴って指示も変わることが多いからである。

そこで、事前にプレゼンテーションソフトによって背景や BGM、効果音などをしっかり作りこんでおく。そして、練習や発表がどの段階であっても、同じ背景や BGM、効果音などを同じタイミングで出せるように設定する。これにより、児童が安心して演技できると考えた。

2. 実践の方法・流れ

平成 30 年度は「オズのまほう使い」、令和元年度は「青い鳥」の劇のシナリオを早くから準備し、夏休みに全担任と検討した。PowerPoint で場面ごとに背景や BGM、効果音などをシナリオに合わせて作り、セリフを読みながらタイミングを調整した。11月までに小道具や衣装を合わせておき、12月に各学級でセリフを読む練習を始めた。1月になるとマルチスペースで場面ごとに練習を始め、1月下旬には保護者に発表して、アドバイスをもらった。その後、体育館のステージで練習を始め、2月上旬には全校児童に劇を発表した。そして、2月中旬に2回の練習を経て、文化ホールの大ステージで発

表を行った。大きな変更がないように担任や支援員と打ち合わせしながら、シナリオを確認した。背景や BGM、効果音も練習が始まる前に全担任で確認し、調整した。練習のときにはスクリーンに背景を大きく投影し、BGM や効果音に合わせて動きやセリフを言うように指導した。ステージが変わっても立ち位置がわかるように、移動する場所に名前を書いたビニールテープを、色を変えながら床に貼った。

3. 実践の結果・考察

練習のときは、1時間ごとにスクリーンやパソコン、プロジェクターを準備し、後片付けしなくてはならず苦労したが、児童が混乱することなく最後まで集中して練習に取り組めた。発表会もほぼ全員が参加できて、充実した発表会となった。保護者からも、「学習発表会「オズのまほう使い」のとても素晴らしい演技に、年々子どもたちの成長を感じました。しっかりとセリフも言えて演技もできて、この日のために毎日頑張ったんだね。」「今年は4年生ということもあって出番の多い役柄でしたが、本人なりに大きな声で精いっぱい頑張っている様子が見られて、頼もしく感じられました。」などと、児童の演技のよさやこれまでの頑張りを称賛する声をいただいた。

4. 今後に向けて

令和2年度はコロナ禍により市の合同学習発表会は中止になったが、保護者への参観という形で劇を発表した。児童の学習の成果や頑張りを発表するのに演劇は有効な手段である。今後も児童が安心して演技できる環境をプレゼンテーションソフトで構築していきたい。

1. 「PowerPoint を活用した学習発表会」の実践に関わって

小学校では、発達段階も 1 年生から 6 年生と幅が広い。環境が変わると不安になったり、急な変更をうまく受け入れられなかったりと、子どものこだわりや持っている特性も十人十色である。一人ひとりの実態に応じて、様々な支援の工夫をしながら学習活動を仕組む必要がある。私自身も、特別支援学級の担任の時には、時間をかけて教材研究をし、支援を検討した。本実践にある学習発表会にも担任している子どもとともに参加したこともあり、その時の経験も踏まえて、本実践について思うところを述べたい。

本実践においては、子どもが、学習発表会本番において、安心してのびのびと発表でき、練習の成果を発揮できる姿を目指して、プレゼンテーションソフトを活用された。環境の変化に苦手さのある子どもへの環境調整的な支援への ICT 活用の実践である。その中で、私が着目したポイントは二つある。

一つ目は、実際の童話の世界をステージ上に作り出すために、物語の挿絵等を背景としてスクリーンに映し出すという映像の活用である。昔は、模造紙を接ぎ合わせて、みんなで描いた絵を使用した。それはそれで味わい深かったが、大きなホールのステージには小さく、迫力がなかったものである。しかし、本実践のように、大きなスクリーンに大きく映し出した物語の世界そのものの背景は迫力があり、子どもは、本当に童話の世界に入ったような感覚になるのではないだろうか。セリフや演技も自信をもって表現でき、一生懸命練習した成果を気持ちよく発揮できる場になったことだろう。

二つ目は、背景や効果音、BGM が練習も本番も同じタイミングで、同じように提示できるようにしたことである。マルチスペース、体育館、本番の大ホール。練習が進むにしたがって演じる場、雰囲気、環境が変化していくため、提案にもあるようにその場に応じた臨機応変な対応が苦手な子どもは大変戸惑う。急な変更に敏感に反応し固まってしまうたり、声が出せなかったりすることもある。私の経験からも、何度も練習を繰り返し、一生懸命にセリフを覚え、動きを工夫し、自信を持ったとしても、環境の違いや本番の緊張感で委縮してしまう子は少なくなかった。本実践では、そういったことを想定して、一番輝いてほしい本番で、子どもが安心していつもどおりの力を発揮し、のびのびと表現できることを目指された。そのために、プレゼンテーションソフトの活用により、効果音や BGM を背景の入れ替えのタイミングに合わせて調整し、何度でも再現できるように設定された。タイミングや環境をできるだけ変化させない支援は、非常に有効であり、価値あることだと考える。

本実践では、特別な配慮を必要とする子どもたちに対して、必要な支援は何かをきちんと見定め、プレゼンテーションソフトにより実現された。ICT 機器の発達はめざましいものがあるが、そういった支援技術の生かし方を考えながら、子どもの学びの保障のために、これからも視聴覚・ICT 機器の効果的な活用を進めていきたい。

2. 今後に向けて

特別支援教育では、以前から、学習障害や対人コミュニケーション、時間・予定の把握における困難さ、感覚過敏などが伴うことのある自閉症スペクトラム等の発達障がいのある児童生徒にとって、ICT 機器を支援技術として活用することの有効性が広く知られている。現在 GIGA スクール構想により、一人 1 台のタブレット端末が配備され、個別最適化された学びの実現が求められている。特別支援教育においては、タブレットやパソコン等を子ども自身が活用することで、読むこと、書くこと、聞くこと、話すこと、計算すること、考えをまとめることなどにある困難さを避け、一人ひとりの強みを生かして学習機会に参加することを推進していく必要がある。また、その支援が当たり前となるように、我々教育に携わる者のスキル向上も進めていかなければならない。ICT の活用により、読みや書き等に苦手さのある子どもの学びの保障をより一層推進していきたい。

全体会

講演（ホームページのアーカイブ上で動画公開 ※視聴方法は6ページをご覧ください。）

テーマ 『NHK for School の活用について』

NHK制作局 NHK for School 編集部

編集長 大本 秀一 氏

全体会講演内容

およそ 2,100 本の教育番組、関連する 7,000 本の動画クリップを提供するNHK for School。

この動画（約 10 分）では、NHK for School 編集長が、NHK for School に新しく加わった機能や最新情報をご紹介します。